

平成12年度

くす　ばる　さか　の　うえ　い　せき
楠原坂ノ上遺跡

社会福祉法人「徳榮会」特別養護老人ホーム
建設に伴う埋蔵文化財調査報告書

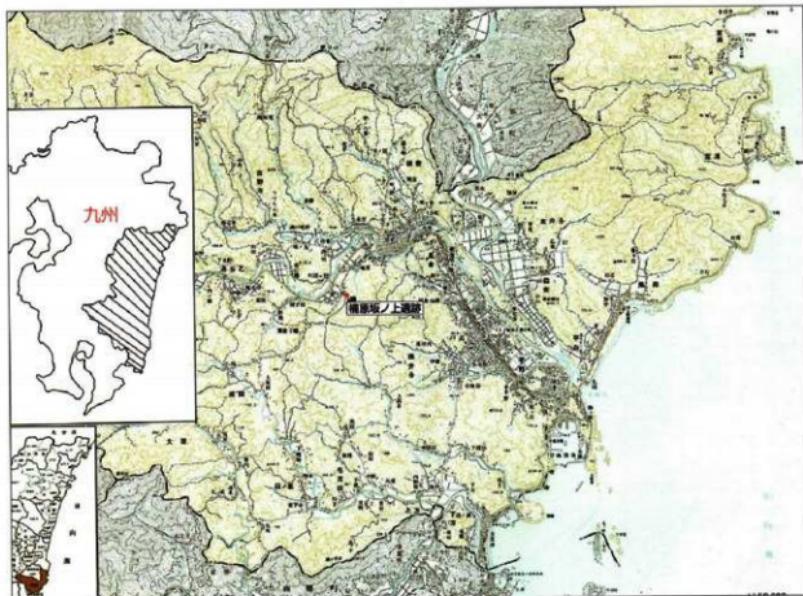
2001年3月

宮崎県日南市教育委員会

平成12年度

くす
ばる
さか
の
うえ
い
せき
楠原坂ノ上遺跡

社会福祉法人「徳榮会」特別養護老人ホーム
建設に伴う埋蔵文化財調査報告書



2001年3月

宮崎県日南市教育委員会

序

この報告書は、平成10年度に社会福祉法人「徳榮会」より受託し、日南市教育委員会で調査を実施した楠原坂ノ上遺跡の報告書です。

日南市におきましては、平成元年と2年に市内の遺跡詳細分布調査を実施いたしましてから、開発に先立つ遺跡の有無確認調査やその保護に努めてまいりました。開発に際しまして、本調査を実施した遺跡は約10カ所ほどを数え、これまで不明とされておりました本市の歴史も徐々に解明されて参りました。中でも弥生時代につきましては、平成7年度に実施いたしました「影平遺跡」にて本市最初の集落遺跡を検出できたほか、その後の「大園遺跡」の調査でも集落遺跡を確認できました。また、平成8年度に実施いたしました「川辺ヶ野遺跡」では、本市では初めての縄文時代早期の舟形をした集石遺構なども検出できました。

今回の調査では、これまでの調査に引き続き弥生時代の集落の存在が期待されましたが、遺物の検出だけにとどまりました。しかし、検出された遺物などは、今後の日南市さらには、南那珂地域の弥生時代の研究をより深めていく上では貴重な資料となることが期待されます。

この報告書が、学術資料としてはもとより文化財への理解と認識をより深める一助となり、生涯学習や学校教育などの場において幅広く活用されれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、本調査実施にあたり格別のご配慮を賜りました社会福祉法人「徳榮会」、調査にあたりご指導、ご協力をいただきました県文化課、県埋蔵文化財センターの方々に厚くお礼を申し上げます。また、調査中にご支援とご理解を賜りました関係各位、地元の方々、調査に参加していただきました作業員の方々にも厚くお礼を申し上げます。

平成13年3月

日南市教育長 倉山 久信

例　　言

1. 本書は、特別養護老人ホーム「はまゆうの里」建設工事に伴い1998年に実施された埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は、社会福祉法人「徳榮会」より委託され、日南市教育委員会が受託して行った。

3. 調査の体制

〔平成10年度〕（発掘調査を実施）

調査主体　日南市教育委員会

前教育長　野邊　行俊（平成10年9月30日にて任期満了）

教育長　倉山　久信（平成10年10月1日より現職）

社会教育課長　藤本　統雄

文化係長　岡本　武憲

庶務担当　教育総務課主事　平原　千鶴子

調査担当　文化係主事　的場　丈明

調査補助員

鎌田留次郎、鎌田和枝、黒木正男、黒木力ヨ、田畑フミ子、

前田マサ子、福田スエ、大田原俊太郎、岩永良典、谷口キヨ子、

長友ヤツミ　他

〔平成11年度〕（整理作業）

調査主体　日南市教育委員会

教育長　倉山　久信

社会教育課長　柳田　功

課長補佐兼文化係長　岡本　武憲

庶務担当　教育総務課主事　崎田　弘子

調査担当　文化係主事　的場　丈明

整理作業　整理作業員　貴島芳栄、谷口キヨ子、山室　光　他

〔平成12年度〕（整理作業及び報告書刊行）

調査主体　日南市教育委員会

教育長　倉山　久信

社会教育課長　石井　孝一

課長補佐兼文化係長　岡本　武憲

庶務担当　教育総務課主事　古澤　ヒデ子

調査担当　文化係主事　的場　丈明

整理作業　整理作業員　貴島芳栄、谷口キヨ子、山室　光、川瀬　真　他

4. 現地調査は、的場が行った。

5. 現地における実測は、的場、和田、鎌田（留）、谷口が行った。

6. 遺構の実測及びトレースは、的場、和田、谷口が行った。

7. 遺物の実測及びトレースは、（株）エーティツクに委託した。

8. X線CTスキャナについては、熊本大学工学部教授尾原祐三氏に依頼し、分析を行ってもらった。

9. 空中写真撮影については、（株）スカイ・サーベイの森氏による。

10. 本書における方位は磁北、レベルは海拔高である。

11. 出土品は、日南市教育委員会にて保管している。

12. 本書の執筆編集は、的場が行った。

本文目次

卷頭グラビア

卷頭グラビア (1)	調査後全景
卷頭グラビア (2)	A地区土層断面
卷頭グラビア (3)	遺物出土状況

第I章 はじめに

第1節 調査に至る経過	4
-------------------	---

第II章 遺跡の概要

第1節 遺跡の立地と環境	4
1. 地理的環境	4
2. 歴史的環境	7
第2節 遺跡の概要	12
1. 基本層序	12
2. 調査区設定及び遺構	12
3. 遺物	14
(ア) 土器	14
(イ) 石器	14

第III章 調査

第1節 遺構	14
1. A地区の遺構	14
2. B地区的遺構	14
第2節 遺物	14
1. A地区的遺物	14
2. B地区的遺物	20

第VI章 科学分析

第1節 X線CTスキャナ分析	25
1. X線CTスキャナについて	25
2. X線CTスキャナの測定結果と利用法について	25
3. X線CTスキャナ解析画像	26

第V章 まとめにかえて	29
-------------------	----

挿図目次

第 1 図 楠原坂ノ上遺跡位置図	1
第 2 図 楠原坂ノ上遺跡周辺地形図	3
第 3 図 楠原坂ノ上遺跡基本土層図	12
第 4 図 楠原坂ノ上遺跡調査区設定図	5
第 5 図 楠原坂ノ上遺跡調査区と老人ホーム施設本体との相関図	6
第 6 図 楠原坂ノ上遺跡A地区出土遺物分布図	9
第 7 図 楠原坂ノ上遺跡A地区出土土器分布図	10
第 8 図 楠原坂ノ上遺跡A地区出土石器及び石等分布図	11
第 9 図 B地区平面図	13
第10図 A地区土層断面図	15
第11図 B地区土層断面図	16
第12図 A地区出土遺物その1	18
第13図 A地区出土遺物その2	19
第14図 A地区出土遺物その3	21
第15図 A地区出土遺物その4	22
第16図 A地区及びB地区出土遺物その5	23
第17図 A地区出土遺物その6	24

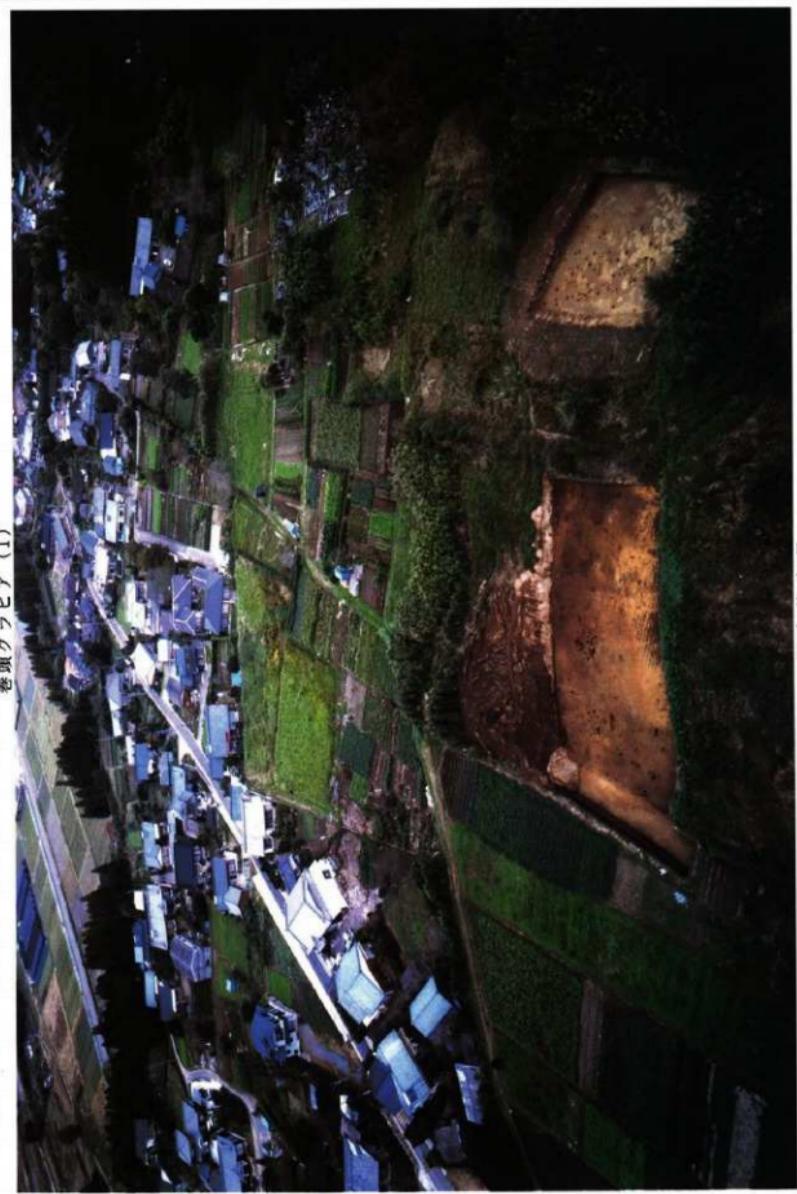
表 目 次

第1表	遺跡番号及び遺跡名対照表	2
第2表	出土土器観察表（その1）	31
第3表	出土土器観察表（その2）	32
第4表	出土土器観察表（その3）	33
第5表	出土土器観察表（その4）	34
第6表	土鍤・石器法量計測表	35

図 版 目 次

図版 1	補原坂ノ上遺跡全景	36
図版 2	A地区調査前状況	37
図版 3	B地区調査前状況	37
図版 4	A地区遺物出土状況（その1）	38
図版 5	A地区遺物出土状況（その2）	39
図版 6	A地区土層断面（その1）	40
図版 7	A地区土層断面（その2）及びB地区土層断面	41
図版 8	A地区構造等検出状況（アカホヤ層上部）	42
図版 9	調査終了後状況	43
図版10	A地区およびB地区調査終了後状況	44
図版11	A地区出土遺物（その1）	45
図版12	A地区出土遺物（その2）	46
図版13	A地区出土遺物（その3）	47
図版14	A地区出土遺物（その4）	48
図版15	A地区出土遺物（その5）及びB地区出土遺物	49
図版16	A地区出土遺物（その6）	50
図版17	GPS測量（座標観測）の状況	51
図版18	作業風景	52

卷頭グラビア（1）



調査後全景

巻頭グラビア（2）



A地区土層断面

巻頭グラビア（3）



遺物出土状況

楠原坂ノ上遺跡位置図

第1図



遺跡番号及び遺跡名対照表

遺跡番号	名 称	所 在 地	種 別	時 代	遺跡番号	名 称	所 在 地	種 別	時 代
109	貝塚城跡 (水ノ尾城跡)	大字宮浦字鬼ヶ久保	城 路	中 世	401	堀ノ尾跡	大字星倉字栗殿城	城 路	中 世
201	万ヶ追遺跡	大字凱田字万ヶ追	散 布 地	平安～中世	402	新山城跡	大字星倉字本丸地	城 路	中 世
202	松ノ元遺跡	大字凱田字松ノ元	散 布 地	繩 文	403	駿道門遺跡	大字星倉字駿門	散 布 地	中 世
203	狐塚古墳	大字凱田字弓場元	古 墓	古 墓	404	駿道尾野遺跡	大字星倉字立久保	散 布 地	古墳～中世
204	木場遺跡	大字平山字木場	散 布 地	古 墓	405	前田下遺跡	大字星倉字前田下	散 布 地	绳文～中世
205	駒宮遺跡	大字平山字別府	散 布 地	弥生～中世	406	立久保遺跡	大字星倉字立久保	散 布 地	中 世
206	高佐脇跡	大字益安字塚之内	城 路	中 世	407	上謙遺跡	大字星倉字上謙	散 布 地	绳文～中世
207	前無田遺跡	大字東井分乙字前無田	散 布 地	中 世	408	射場遺跡	大字星倉字南原	散 布 地	中 世
208	鬼ヶ城跡	大字字城ヶ平地	城 路	中 世	409	時任遺跡	大字星倉字石ヶ嶺	散 布 地	中 世
209	沢渡遺跡	大字松永字沢渡	散 布 地	中 世	410	下謙古墳	大字星倉字石ヶ嶺	古 墓	古 墓
210	陣ヶ追遺跡	大字松永字陣ヶ追	散 布 地	中 世	411	川向遺跡	大字星倉字沙浦	散 布 地	中 世
211	犬ヶ城跡	大字松永字沢渡	城 路	中 世	412	下山湖遺跡	大字星倉字下山湖	散 布 地	弥生～中世
212	殿所遺跡	大字殿所字上ノ段他	散 布 地	绳文～中世	413	塙ヶ谷北遺跡	大字星倉字塙ヶ谷	散 布 地	中 世
213	岩ヶ尾遺跡	大字殿所字岩ヶ尾	散 布 地	弥生～古墳	414	塙ヶ谷遺跡	大字戸高字塙ヶ谷	散 布 地	弥生～中世
214	中ノ尾谷跡	大字殿所字城ヶ平他	城 路	中 世	415	塙ヶ谷南遺跡	大字戸高字塙ヶ谷	散 布 地	中世～近世
301	飛ヶ峯遺跡	大字板敷字出水ヶ尾	散 布 地	古墳～中世	416	野添遺跡	大字戸高字野添	散 布 地	绳文～中世
302	談義所遺跡	大字今町字広木田	散 布 地	绳文～中世	417	田畠追跡	大字戸高字田追	散 布 地	弥生～中世
303	糺 遺 跡	大字板敷字島田	散 布 地	平安～中世	418	横通遺跡	大字戸高字横通	散 布 地	弥生～中世
307	西山寺遺跡	大字板敷字西山寺	散 布 地	绳文～中世	419	縣城跡	大字戸高字古城他	城 路	绳文～中世
308	上永吉遺跡	大字吉野方字拂木原	散 布 地	中 世	420	城之下遺跡	大字戸高字城之下他	散 布 地	弥生～近世
309	片平遺跡	大字吉野方字片平	散 布 地	绳文～中世	601	吾谷上床遺跡	大字酒谷乙字上床	散 布 地	
310	蛭 肥 城 跡	大字袖原字舞雞跡	城 路	中世～近世	602	塙ヶ倉遺跡	大字酒谷乙字上塙ヶ倉	散 布 地	绳文～近世
311	蛭肥城下町	大字袖原字板敷他	城 下 町	近 世	603	愛宕越遺跡	大字酒谷乙字愛宕越	散 布 地	中 世
312	篠ヶ城遺跡	大字吉野方字篠ヶ城	散 布 地	绳文～中世	604	宮下遺跡	大字酒谷乙字宮下	散 布 地	绳文～近世
313	上ノ原遺跡	大字吉野方字上ノ原	散 布 地	绳文～中世	605	宮ノ原遺跡	大字酒谷乙字宮ノ原	散 布 地	绳文～近世
314	川辺ヶ野遺跡	大字吉野方字川辺ヶ野	散 布 地	绳文～中世	606	稚子田遺跡	大字酒谷乙字稚子田	散 布 地	绳文～近世
315	八幡原遺跡	大字袖原字八幡原	散 布 地	中 世	607	野地遺跡	大字酒谷乙字野地	散 布 地	近 世
316	橋原坂上遺跡	大字袖原字原坂ノ上	散 布 地	绳文～中世	608	下村遺跡	大字酒谷乙字下村	散 布 地	绳文～近世
317	源田馬場遺跡	大字袖原字源訪ノ馬場	散 布 地	绳文～中世	609	鶴戸谷遺跡	大字酒谷乙字鶴戸谷	散 布 地	绳文～近世
318	上 城 跡	大字袖原字上城	城 路	中 世	610	峰久保遺跡	大字酒谷乙字峰久保	散 布 地	弥生～近世
319	大原遺跡	大字袖原字大原遺	散 布 地	中 世	611	酒谷城跡	大字酒谷乙字城ノ下	城 路	中 世
320	寺ノ尾遺跡	大字板敷字寺ノ尾	散 布 地	弥生～中世	612	下永野遺跡	大字酒谷乙字下永野	散 布 地	绳文～近世
321	堂之元遺跡	大字吉野方字堂之元	散 布 地	中 世	613	追間遺跡	大字酒谷乙字追間	散 布 地	绳文～中世

楠原坂ノ上遺跡周辺地形図

第2図



第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経過

社会福祉法人「徳榮会」が計画した特別養護老人ホーム建設予定地は、それまで短大の誘致やその他の開発計画などの候補地として候補にのぼり、埋蔵文化財の取り扱いについて事前協議の必要な場所とされてきた。

平成12年度から実施予定であった介護保険制度導入に先だって、宮崎県内では県南地区最後の特別養護老人ホーム施設の認可が日南市でおろされようとしていた。宮崎県内でも、特に急速に進んでいる日南市の高齢化社会に対応すべく今回の特別養護老人ホームの建設となった訳である。

建設予定地となった日南市大字楠原1840番地は、周知の埋蔵文化財包蔵地316番にあたり、平成元年から2年までの遺跡詳細分布調査では、縄文時代から中世までの遺跡の存在が予想された。

本市教育委員会では、開発に先立って本調査実施の要否を判断するために、遺跡の詳細な時代や性格、遺構の有無やその規模などを把握するため確認調査を実施することとした。

確認調査は、平成10年7月10日～10月30日の間で実施した。調査では、現状が畑地として耕作中であったり、雜木林などになっていたため掘削が可能な場所でできるだけ詳細に実施するようトレンチを設定した。その結果、建設計画予定地内に14カ所のトレンチを設定することができた。（第5図参照）

確認調査の結果、14カ所のトレンチの内、NO.1、NO.2、NO.3、NO.4、NO.11、NO.12、NO.13の7カ所から縄文時代後・晚期の土器片や弥生式土器の破片、磨製石斧などが検出された。

特にNO.3、NO.4、NO.12のトレンチからは、弥生式土器片も検出され、集落跡の存在なども予想された。これに対してNO.6、NO.7、NO.9のトレンチを設定したその他のトレンチを設定した区域よりも一段高い区域〔K-12グリッド～K-16グリッド、L-12グリッド～L-16グリッド、M-12グリッド～M-16グリッドを有する区域（第4図参照）〕では、火山灰層が多く検出され遺物などは皆無であった。

トレンチNO.1～NO.5及びNO.10～NO.14が標高約50メートルから55メートルの位置に存在していたことに対し、NO.6、NO.7、NO.9は、標高約58メートルから60メートルの位置に存在していた。地権者の方や地元にて野菜などを栽培されている方によると戦後に畑地として、この丘陵地を削平し、耕作しやすいように圃場した経緯があるとのことであった。

確認調査の結果、開発対象地全域に本調査の必要性はないものと判断されたが、区域的には本調査が必要なエリアが存在し、老人ホーム建設に際しては、本調査の実施が必要であると判断された。

これらの調査結果について、社会福祉法人「徳榮会」へ回答を行い、老人ホーム建設工事の実施にあたっては、遺跡の保護に理解と協力をお願ひした。

この後、社会福祉法人「徳榮会」と本市教育委員会で老人ホーム建設工事の重要性と遺跡の保護について協議を行った。本体工事の工期と費用の負担などの諸問題について協議を重ねた結果、地下の埋蔵文化財が破壊される部分についてのみ遺跡の記録保存を目的とした調査を実施することとした。しかし、工事完成後に新たに遺跡の存在が予想される部分について新たな開発を実施するときは、改めて本調査を実施することを条件として附した。

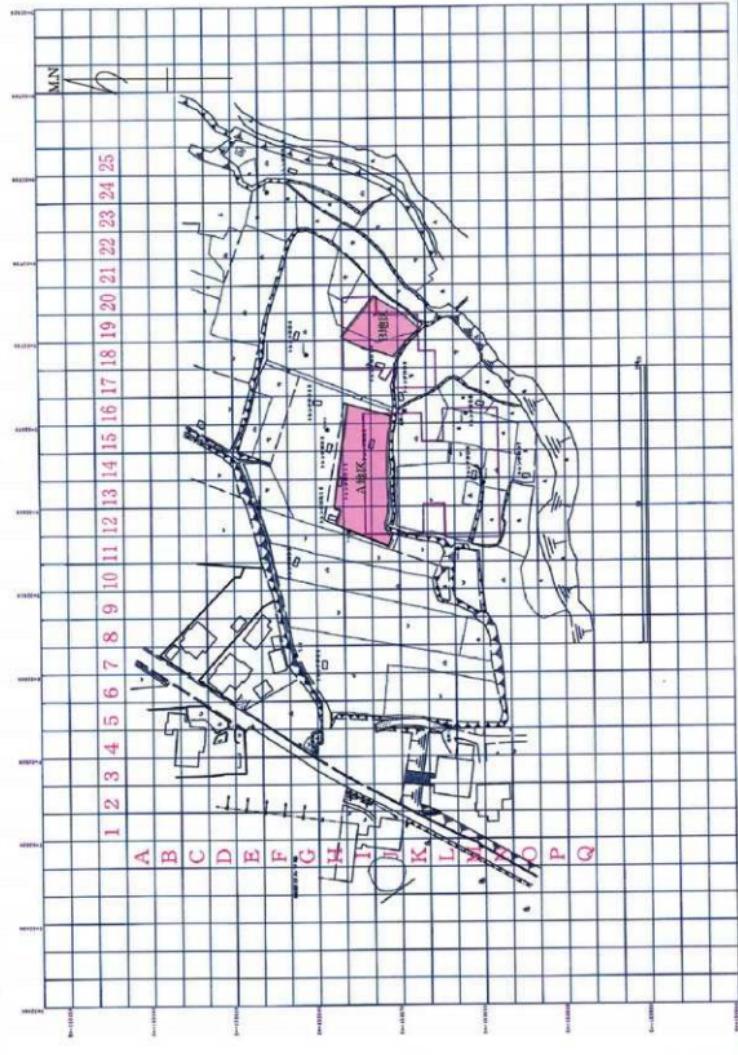
第Ⅱ章 遺跡の概要

第1節 遺跡の立地と環境

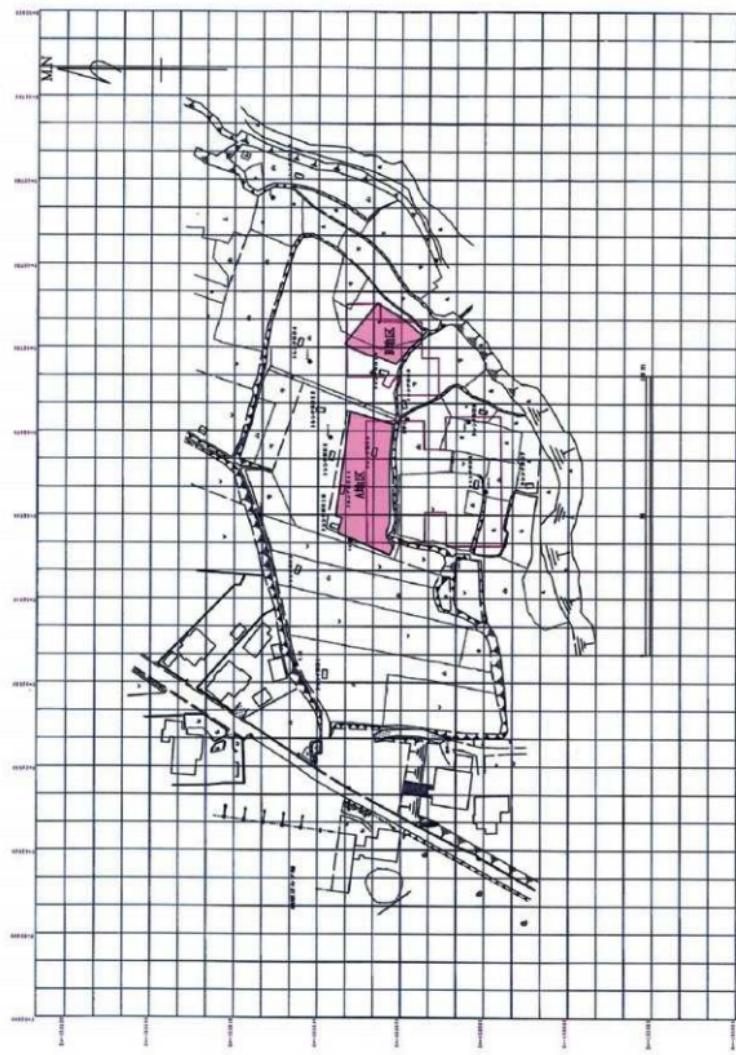
1. 地理的環境

日南市の地形は、山地・平野・海岸から構成されている。市域の大部分を占める山地は、丘陵性山形をなし、市のほぼ中央を流れる広渡川を境として西半分と東半分に分けられる。西半分は、南那珂山地の一部を除いては、なだらかな丘陵地形を形成しているのに対して、東半分は比較的急峻な一つの独立

楠原坂ノ上遺跡調査区設定図



楠原坂ノ上遺跡調査区と老人ホーム施設本体との相関図



した山地を形成しており鵜戸山塊と呼ばれている。この地形の違いは、東半分が浸食に比較的強い宮崎層群からなっているのに対し、西半分が浸食に対する抵抗力の比較的弱い日南層群から形成されていることに起因しているものと思われる。しかし、日南層群地域でも、北西部や西部の奥地となると砂岩に富む比較的堅固な地層からなっているので急峻な地形を残しており、標高千メートルに近い小松山や男鈴山等の本地域の最高峰群を形成している。

日南層群は、そのほとんどが純海成層で岩層的には砂岩層、砂岩頁岩互層、頁岩層からなり頁岩層がその大部分を占めている。日南層群下層部では、150～200メートルの厚さで頁岩を主としており、中層部は流紋岩質凝灰岩をはさむ砂岩にはじまり厚い頁岩に終わる一帯積輪廻を示し、300～500メートルの厚さに達する。上層部も砂岩にはじまり頁岩に終わる一帯積輪廻を示すが、層厚は南東部で200メートルを測り、北西部に向かい減じて100メートル以下となる。

日南層群はこれまでの産出化石から新生代古代三紀に比定され、絶対年代で3300万年前～1500万年前と考えられる。また、最近酒谷川上流や殿所等からネレイテスと呼ばれる生痕化石（TRACEFOSSILS）の一類だと推定されるものが発見されている。これは環虫類（ごかいのようなもの）がはった跡の化石のことで、環虫類の化石を指すものではなくその這った跡（生存していた状況を示す跡）そのものを示す化石をさしてこう呼称する。

楠原坂ノ上遺跡が立地する標高約55メートルの丘陵地は、本市のほぼ中央部に位置する飫肥地区から南北に約2.5キロメートルに位置する。同遺跡は日南市内を東西に流れる酒谷川の南側に位置し、標高約783メートルの尾鈴山から連なる尾根の一部である。東側には直線距離で9キロメートルで太平洋を望む。酒谷川を挟んだ楠原坂ノ上遺跡の対岸の丘陵地には、平成8年度に本調査を実施した川辺ヶ野遺跡が存在し、縄文時代早期の遺物や集石遺構7基なども検出されている。

2. 歴史的環境

日南市内の遺跡分布調査によれば、確認されている遺跡は山間部をぬって流れる広渡川、酒谷川、細田川などの河川沿いに形成された狭い平野部に隣接する形で存在する丘陵部に多く分布するようである。また、国の伝統的建造物群保存地区に指定されている飫肥地区はその城下町全城を遺跡（311）として周知の埋蔵文化財包蔵地としている。鵜戸地区やリゾート施設の並ぶ宮浦地区などの日南海岸沿いにも、丘陵上や微高地において縄文時代などの遺跡の分布が確認される。

旧石器時代については、これまで遺跡は確認されていない。

縄文時代については、市域において約60ヶ所の遺跡が確認されている。特徴としては早期と後期の遺跡が多いことである。早期の遺跡としてこれまで5遺跡について、調査済であるが、なかでも早期の竪穴式住居跡12軒と集石遺構19基が検出された坂ノ上遺跡（717）は、県内でも最大級の集落遺跡である。このほかの縄文時代早期の遺跡では、平成8年度に調査を実施した川辺ヶ野遺跡にて貝殻文系の土器片を検出し、遺構としても集石遺構を7基検出している。なかでも7号集石遺構はその形状が舟形を呈しており、隣県の鹿児島県内ではいくつか検出例があるものの日南市内、南那珂地域では初めての検出となり貴重な資料といえる。縄文時代後期の遺跡としては市来式土器を中心とした後期縄文土器を多量に出土した上講遺跡（407）がある。上講遺跡では、このほか土製円盤や磨石なども出土している。これらの遺跡の他、殿所遺跡（212）や川北三遺跡（433）などが縄文時代の遺跡として確認されている。

弥生時代については、これまで16ヶ所の遺跡が確認されている。平成7年度に影平遺跡の調査を実施するまでは、弥生時代の遺跡調査では、飫肥城下町遺跡や上講遺跡などで土器等が出土していたものの住居跡等の集落遺跡は、確認されていなかった。弥生時代の遺跡は日南市域においては、段丘上や山裾の丘陵地などに限られており、低地での遺跡は、平成7年度に九州電力（株）日南営業所の新社屋建設に伴う試掘調査で、非常に状態の悪い土器片を数点検出できたことをのぞいては確認されていない。

弥生時代の遺構を伴う遺跡としては、前述のとおり平成7年度に実施した影平遺跡において、弥生時代中

期の集落遺跡が検出された。同遺跡では、住居跡4軒や土坑8基を検出でき、遺物も中期の山口式土器等の遺物を中心に瀬戸内系の鋸歯紋を有する土器や波状紋土器、円形浮紋を有する土器、石皿、磨り石、磨製石器など多種多様に出土している。また、これに続く時代の遺跡として平成8年度に調査を実施した「大園遺跡」があげられるが、同遺跡からは、弥生時代終末期の住居跡や土坑が3基確認されている。また、出土遺物においては、古墳時代初頭のものと思われる遺物も多數出土している。

古墳時代の遺跡や墳丘で市内で確認されているものでは、県指定の細田古墳（702）と東郷古墳（008）の2基を含めた5基の古墳が存在する。油津港を見下ろす丘陵上に築かれた油津山上古墳は、日南市内では最古の古墳と考えられていたが、現在は存在しない。古墳時代終末期に至っては風田の海岸に近い砂丘上に立地し、現在は国立療養所日南病院の敷地内に存在する狐塚古墳（203）がある。この古墳については、平成6年度にその規模や性格を把握するために本調査を実施し、勾玉や切り子玉・耳環などの装飾品、辻金具・雲珠・轡などの馬具、鉄鎌・刀剣などの武具、須恵器・ハソウ・横瓶などの器類と多種多様な副葬品が検出された。中でも青銅製鏡2個や青銅製鏡3個の発見は、貴重で特に鏡についてはこれまで県内で2例の出土例が報告されているのみである。石室の大半は築造当時の原形をとどめていなかったものの残存する玄室の大きさでは、国指定特別史跡「鬼の窟古墳」や同じく特別史跡「千畳古墳」の玄室より一回り大きく県内最大であることが判明した。

横穴式石室の構築方法や出土遺物の畿内色の強いことなどを考慮していくと南九州と大和朝廷との関係を研究していく上では、非常に貴重な発見となった。

一方、日南市域では地下式横穴墓は、これまで確認されていない。また、集落遺跡も確認されていない。

奈良時代から平安時代までの遺跡は、あまり確認されていない。飫肥城下町遺跡（311）の調査で、平安時代の集落が確認されている。また、狐塚古墳（203）では石室内部を転用した形での平安時代の製塙遺構の跡が確認できる。同古墳の内部からは、布目疣痕土器片が約3,000点ほど出土している。この古墳からの出土以外では、約16ヶ所の市内に存在する遺跡から採集されている。

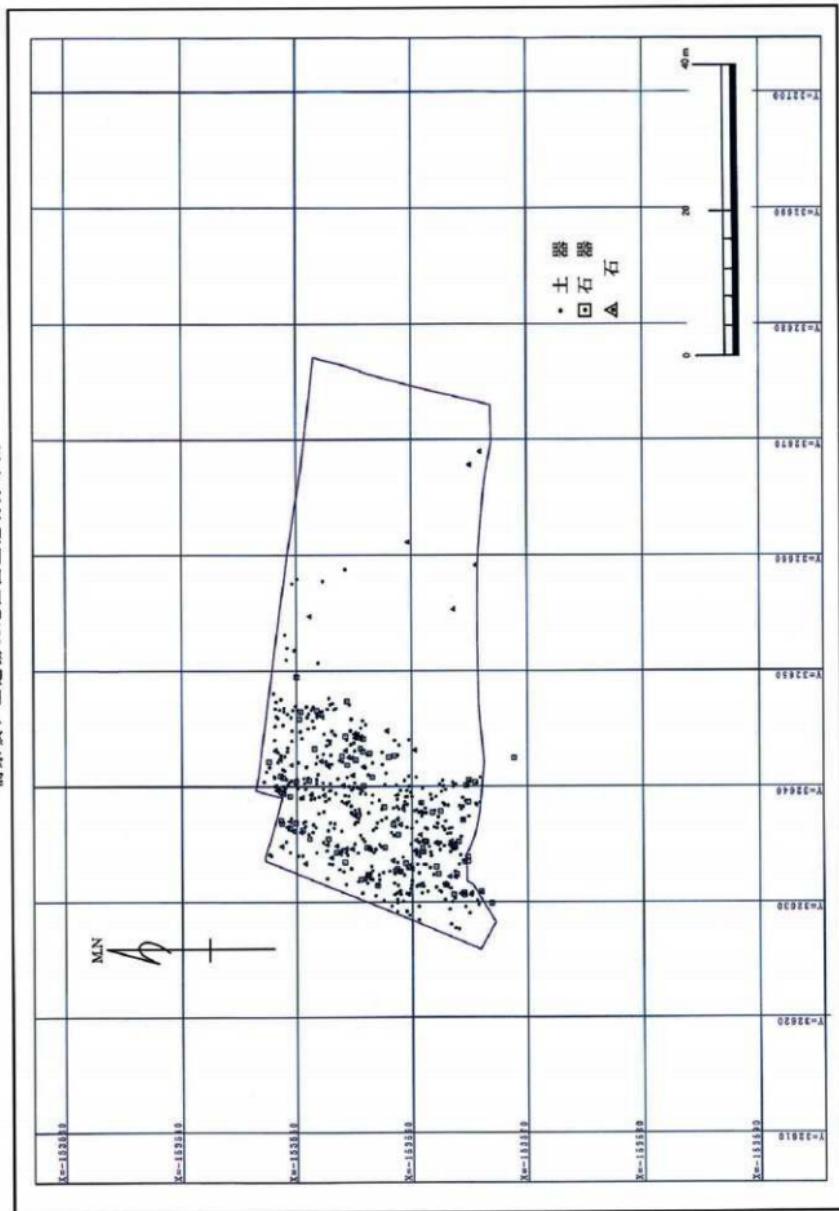
鎌倉時代以降は、山城を中心とした中世城館の遺跡が中心となってくる。現在約13ヶ所の山城及び城館が確認されている。飫肥城跡（310）、酒谷城跡（611）、新山城跡（402）などが代表的なものとして上げられる。

近世に入ってからは、国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されている飫肥城下町遺跡（311）がある。飫肥城は中世より薩摩藩島津氏と伊東氏が再三合戦を行い城主が入れ替わってきたが、伊東祐兵の入城以来は、400年間にわたり伊東氏により統治してきた。飫肥地区には、長持寺廃寺跡（321）や大迫寺廃寺（322）などの寺院跡や大龍寺跡墓碑群、飲樂寺の墓碑群などがある。

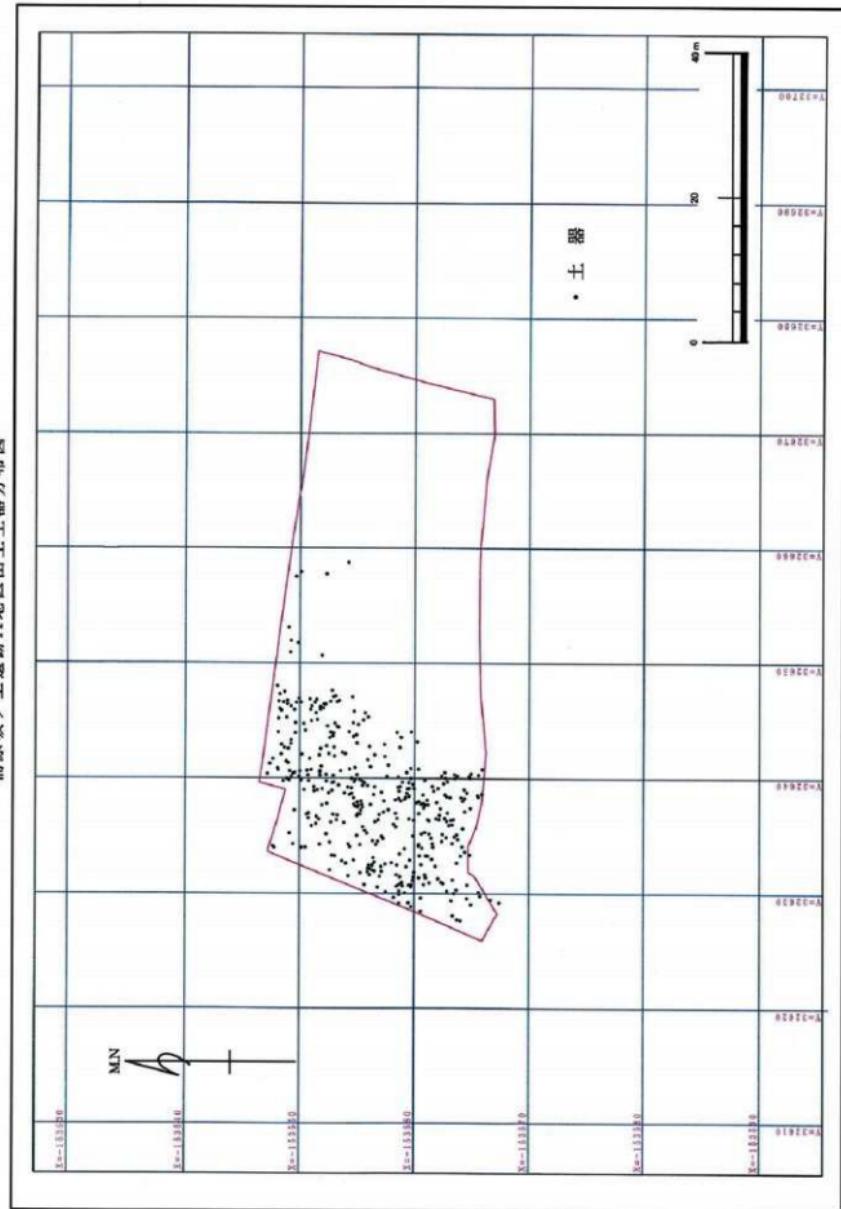
《参考文献》

- (1) 『日南市埋蔵文化財調査報告書 第1集 日南市遺跡詳細分布調査報告書I』
日南市教育委員会1990年3月
- (2) 『日南市埋蔵文化財調査報告書 第2集 日南市遺跡詳細分布調査報告書II』
日南市教育委員会1993年3月
- (3) 『日南市埋蔵文化財調査報告書 第3集 飫肥城跡』
日南市教育委員会1994年3月
- (4) 『日南市埋蔵文化財調査報告書 第4集 日南市内遺跡発掘調査概報』
日南市教育委員会1995年3月
- (5) 『日南市埋蔵文化財調査報告書 第5集 上講遺跡』
日南市教育委員会1995年3月
- (6) 『日南市埋蔵文化財調査報告書 第6集 日南市内遺跡発掘調査概報』
日南市教育委員会1997年3月
- (7) 『日南市埋蔵文化財調査報告書 第7集 影平遺跡』
日南市教育委員会1997年3月
- (8) 『日南市埋蔵文化財調査報告書 第8集 日南市内遺跡発掘調査概報』

図分布遺物出土地区 A 跡跡上

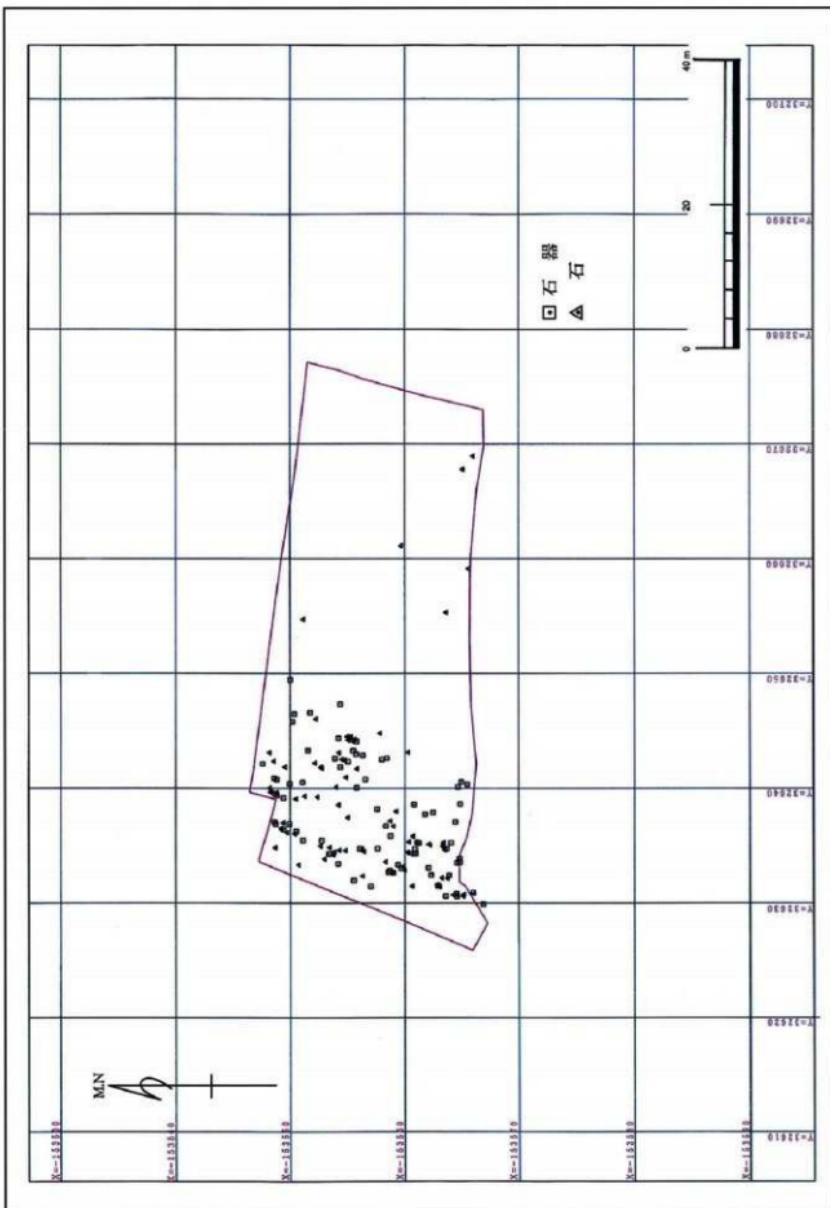


楠原坂ノ上遺跡A地区出土土器分布図



第 7 図

楠原坂ノ上遺跡A地区出土石器及び石等分布図



日南市教育委員会1998年3月

- (9) 『日南市埋蔵文化財調査報告書 第9集 大園遺跡』日南市教育委員会1998年3月
(10) 『日南市埋蔵文化財調査報告書 第10集 日南市内遺跡発掘調査概報』
日南市教育委員会1999年3月
(11) 『日南市埋蔵文化財調査報告書 第12集 川辺ヶ野遺跡・堂之元遺跡・上鶴遺跡・木落遺跡』
日南市教育委員会1999年3月
(12) 『日南市埋蔵文化財調査報告書 第13集 日南市内遺跡発掘調査概報』
日南市教育委員会2000年3月
(13) 『日南市史』昭和53年1月30日 日南市
(11) 『日本化石集 第23集 生痕化石』
(12) 『日本化石図譜』
(13) 『第3版 日南市の文化財』日南市教育委員会2000年3月

第2節 遺跡の概要

1. 基本層序

楠原坂ノ上遺跡は、地質学的には日南市の西部に広がる日南層群の上部に形成され、尾鉢山系の東部に派生する丘陵地上の遺跡である。

調査区は、2地区に分けられた。A地区は、結果的には丘陵地の平坦面と急斜面から構成され、浅い部分では50センチほどのレベルから遺物包含層が始まり、その直下は地山層となった。遺構は、検出されなかった。もっとも深いレベルでは地山層まで3メートル30センチを測り、その比高差は、最大で2メートル50センチ以上となる。これに対し、B地区はおおむねフラットな地形ではあったが、遺物の検出も皆無で表土や耕作土と思われる層の直下には、火山灰層が広がった。

I層：耕作土 10YR 2/3 黒褐色

II層：遺物包含層 繩文時代後・晚期、弥生時代 10YR 3/2 黒褐色 やや粘質性のある土層

III層：アカホヤ火山灰層 10YR 4/4

IV層：遺物包含層 繩文時代早期 10YR 6/4 にぶい黄橙色

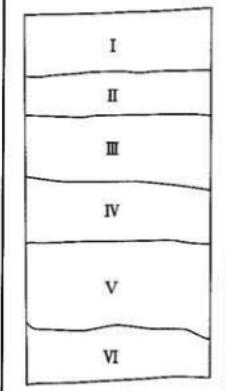
V層：粘質土 10YR 2/1 黒色

VI層：6層中一番強い粘質土 10YR 5/8 黄褐色

2. 調査区設定及び遺構

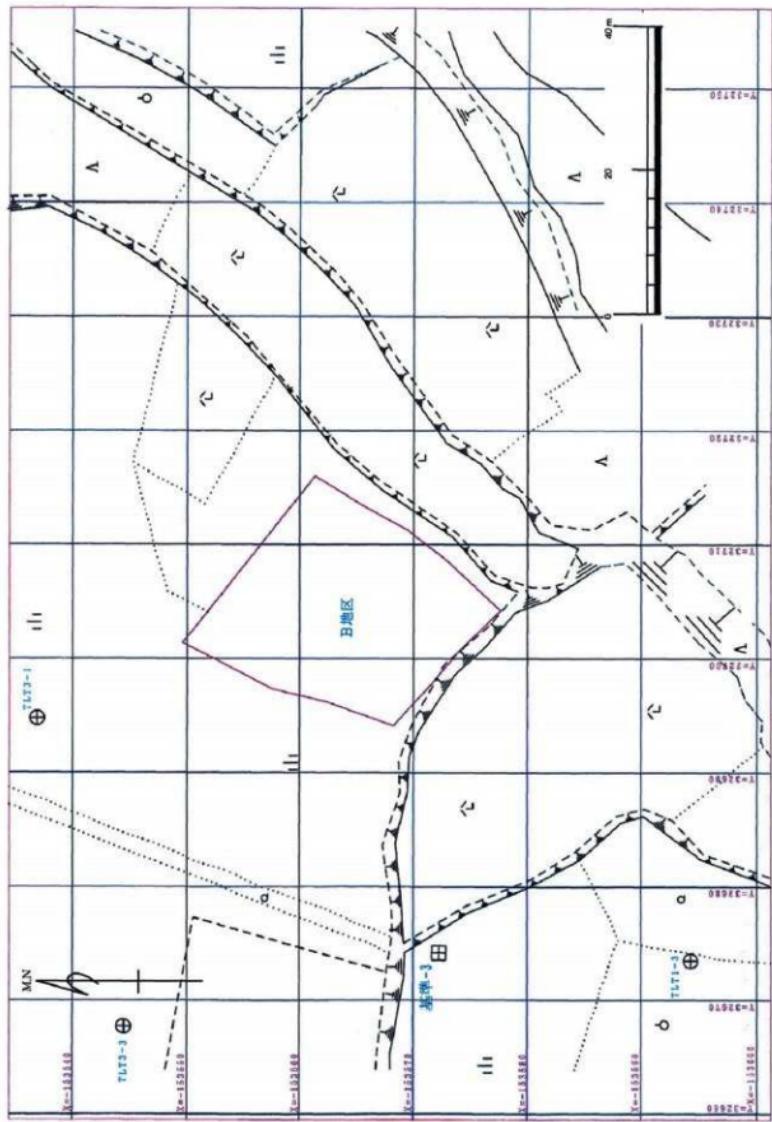
遺跡が立地するこの丘陵地は、標高約58メートルから60メートルの間に広がる比較的フラットなエリア（K-12～K-16グリッド、L-12～L-16グリッド、M-12～M-16グリッドを中心とした地域（第4図参照））1グリッドは、10メートル四方）と一段低くなった標高約55メートル前後のフラットなエリア（F-8～F-20グリッド、G-7～G-22グリッド、H-5～H-22グリッド、I-5～I-21グリッド、J-6～J-20グリッドを中心とした地域（第4図参照））の2地区に大きく分けられた。前者のエリアでは、確認調査の時点で遺構や遺物が検出されず開発に伴う埋蔵文化財に対する影響はないものと判断された。しかし、後者のエリアについてはその全域で遺跡の存在が予想された。前述したように当初は遺跡の存在するエリア全域に渡る調査を予定したが、原因者と幾度となく協議を重ねた結果、遺跡が破壊される部分での必要最低限の調査を実施することで合意する事となった。調査区は、一段低くなったエリア内でも基礎などにより地下の埋蔵文化財が破壊されるエリアとし、大きくA地区とB地区とに分けた。調査結果としてA地区、B地区いずれの地区からも遺物は検出されたものの遺構は検出されなかった。

楠原坂ノ上遺跡基本土層図



第3図

B 地区平面图



第9回

3. 遺物

(ア) 土器

楠原坂ノ上遺跡では、もっとも土層が明確なトレンチNO.4を基本層序とした。この基本土層ではアカホヤ層の上面から弥生時代及び縄文時代後・晚期の土器がアカホヤ層下位層からは、縄文時代早期が検出された。しかし、遺物がほとんど出土しなかったB地区をのぞき、A地区では、傾斜地となっていたため各時代の遺物が混在する形で検出された。このことは、傾斜地であること圃場の際に、一段高い部分の土砂がこのエリアに流れ込んでいることに起因するものではないかと思われる。

前述のとおり、B地区では数点の青磁片が検出されたのみにとどまった。

A地区では、旧石器時代の遺物は確認できなかったが、縄文時代早期の貝殻文系土器が検出された。前・中期の縄文土器は、検出されなかったものの後期の土器や晚期の黒色磨研土器等が多く検出された。次いで弥生時代後期後葉から終末期に比定されると思われる土器が多く検出された。この他中・近世の陶磁器も多く検出された。土器以外では、土錐を4個検出できた。土錐については、その胎土が精製されていることから推察すると中・近世のものではないかと思われる。

A地区的遺物は、縄文早期から中・近世まで年代の幅が非常に広いが、そのほとんどが耕作土直下の第II層からの混在検出であることが特徴的である。

(イ) 石器

楠原坂ノ上遺跡では、石器についても前述の土器と同様B地区からの出土は皆無で、そのほとんどがA地区からの出土である。A地区から出土した石器は、打製石斧、磨製石斧、磨り石、敲き石、石錐、石皿、石鏃等で共存している土器などから推定して、縄文時代後・晚期のものから弥生時代後期後葉のものが中心ではないかと考えられる。

石錐については、1点のみアカホヤ層下位層から出土したものがあり、この石錐については、縄文時代早期のものであると比定できる。

第III章 調査

第1節 遺構

1. A地区的遺構

A地区的調査では、第I層の耕作土を重機にて除去した後に第II層上部にて精査し遺構の検出に努めた。I-14~I-16グリッドとJ-13~J-16グリッドまでは、ほとんど遺物が検出されず、数十センチ掘り下げると火山灰層に突き当たった。I-12、I-13、J-12グリッドでは、第II層を10センチほど掘り下げたレベルで土坑らしきプランが検出されたが、結果的には樹根などによる擾乱の跡であることが判明した。その後遺物包含層をすべて掘り下げ遺構の検出を試みたが成果は上がらなかった。

2. B地区的遺構

B地区においてもA地区と同様に第I層目を除去した後に第II層目上部で遺構の検出に努め、その後第II層目も慎重に掘り下げていったが、結果的には樹根の擾乱による樹根穴の跡を検出するにとどまった。

第2節 遺物

1. A地区的遺物

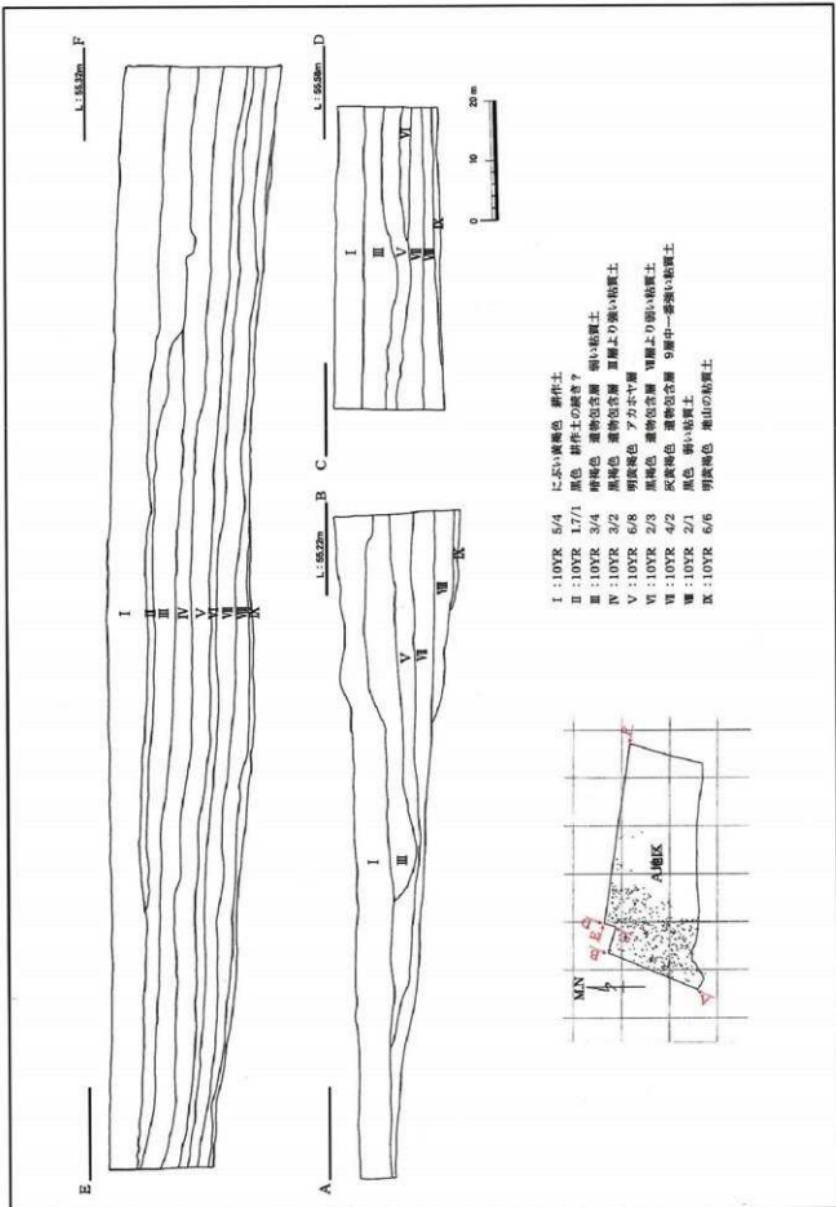
A地区から出土した遺物のほとんどは、平坦部よりは丘陵部の傾斜地に集中して検出された。第II層目からの出土がほとんどであり、第III層のアカホヤ層下部の縄文時代早期の遺物包含層からは、石鏃を1点検出したのみである。前述のとおり、第II層は擾乱層であるため、縄文時代早期~近世までの遺物が一括して検出された。便宜的に時代毎に分類し、記述することしたい。

(ア) 土器

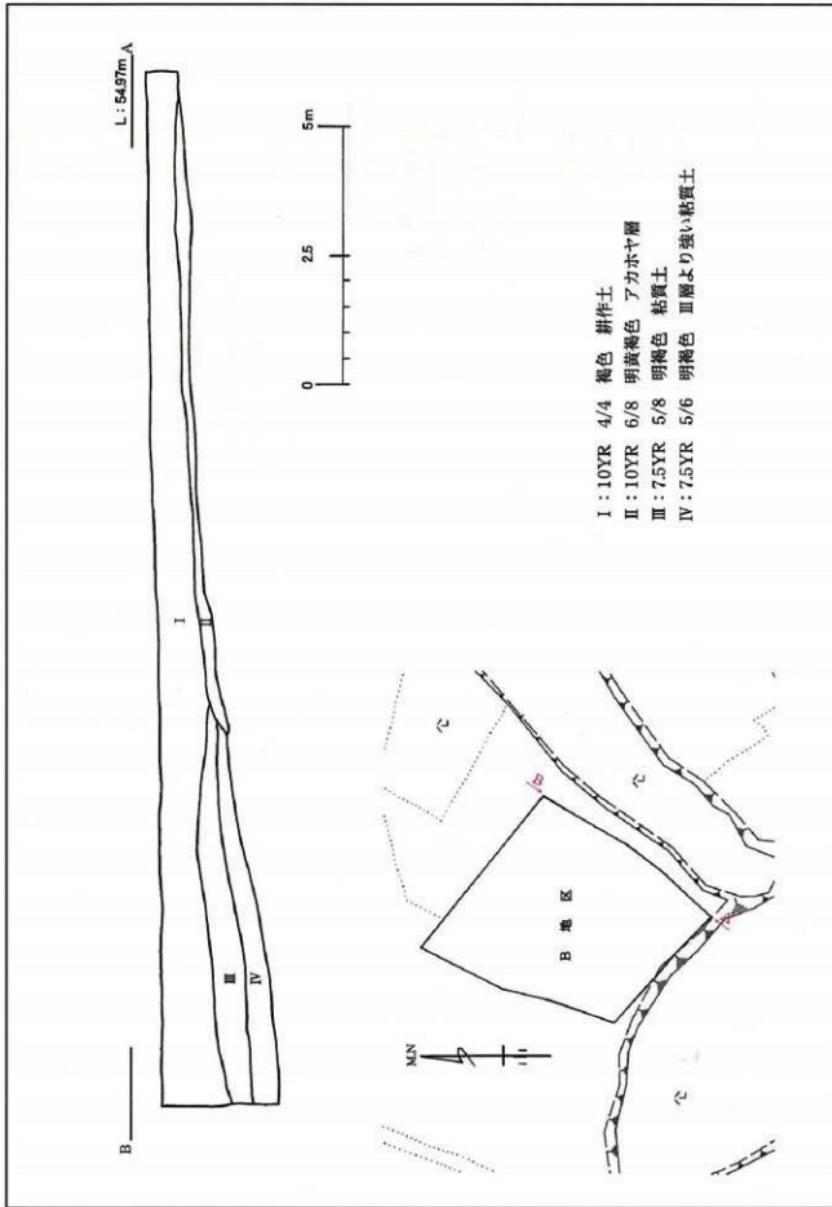
縄文時代早期（第12図9）

縄文時代早期の土器としては、顯著なものはこの1点で口縁部付近の破片と思われ、斜め方向に貝殻刺

A地区土層断面図



B地区土層断面図



突文が3条認められる。焼成は、良好で内面・外面ともていねいなナデ調整が施されている。

縄文時代後・晚期（第12図1～8、10 第13図11～16）

第I類土器（1、3～5、6～7）

1は壺の口縁部で外面全体にすすが付着している。頸部で「く」の字に折れ、その折れた部分をヘラ状のもので沈線を施すように調整してある。破片の左端には、補修孔と考えられる円形の孔が施されている。焼成は、良好である。3は口縁部で外面に比べ、内面の調整がていねいである。焼成は、良好で外面に若干のすすが付着している。4は口縁部で1と同様頸部で「く」の字に折れ、その折れる部分にヘラによる沈線状の調整の跡を認める。1と比べると口縁部分が薄くなっていることが特徴である。焼成は、良好で内外面ともすすの付着がある。5は口縁部付近の破片と思われる。頸部から下部で外反を呈している。焼成は、良好である。6は頸部の破片で、頸部の「く」の字に折れ曲がる部分にあたる。1及び6と同様に折れる部分にヘラによる沈線状の調整の跡を認める。焼成は良好で、内外面とも非常に多量のすすが付着している。7は口縁部の破片で外面は横方向の調整の跡が認められ、多くのすすの付着もみられる。内面は、風化しているが横方向の調整の跡が認められる。

第II類土器（2）

2は口縁部で内外面ともすすが付着している。焼成は良好である。口縁部で若干肥厚する。

第III類土器（8）

8は、口縁部付近の破片ではないかと思われるが断定は、できない。外面に3条の沈線を横方向に施してある。内外面とも非常にていねいなナデ調整が施してある。焼成は非常に良好で、外面には若干のすすの付着も認められる。

第IV類土器（10～16）

10～16までの土器は精製土器で器形のはっきりとしないものもあるが、大半は鉢に分類される。10は鉢の口縁部でその口唇部がいたんくびれて梢円形を呈す。焼成は良好であるが内外面とも風化が激しい。11は、口縁部で内外面とも非常にていねいな磨きによる調整が施されている。頸部でかなりきつく「く」の字に折れ曲がる。口唇部では10と同様、いたんくびれを呈し、梢円形となる。器形は不明である。12は鉢の口縁部で口唇部でいたんくびれを呈し、梢円形となる。焼成は良好で、内外面ともていねいなナデ調整が施されている。右側の肩部に補修孔を施そうとした跡がみられる。13は口縁部で口唇部中央に装飾状の突起を施してある。焼成は良好で、内外面とも非常にていねいな磨きによる調整が認められる。14は鉢の底部付近の破片で外面には多量のすすが付着している。焼成は良好で内外面ともていねいな磨きによる調整が認められる。15は鉢の頸部から肩部にかけての破片で内外面とも非常にていねいな磨きによる調整が認められる。焼成も極めて良好である。16は口縁部の破片で口唇部においていたんくびれを呈し、梢円形となる。焼成は良好で、内外面ともていねいな調整の跡を認める。

弥生式土器（第14図21～33 第15図38）

第I類土器（口縁部22）

22は壺の口縁部で頸部で「く」の字に折れ曲がる。折れ曲がる頸部には、幅約1センチの突帯が後から貼り付けである。焼成は、非常に悪く調整は風化のため観察できない。

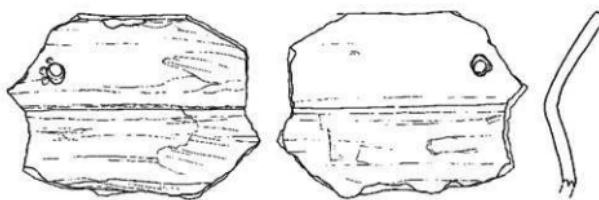
第II類土器（口縁部付近21、23）

21は壺の口縁部付近の破片で頸部で「く」の字に折れ曲がる。焼成は良好で内面は、風化のため調整は確認できないが外面は、縦方向のナデ調整の跡が認められる。胎土には非常に多量の小穂を含んでいる。23は口縁部付近の破片と思われる。その上部には、リボン状の装飾を後から貼り付けである。焼成は良好である。

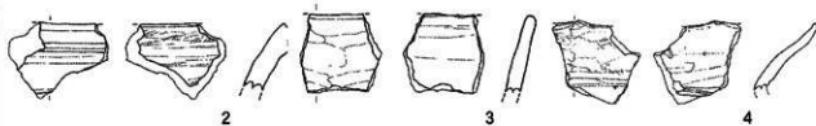
第III類土器（底部24～33）

24～33は全て底部であるが、器形の判別できるものは33の壺のみである。他の底部については、壺の底

A地区出土遺物その1



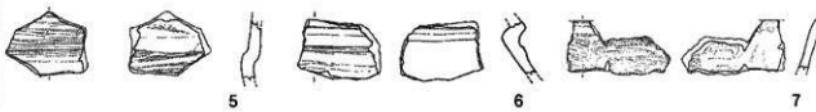
1



2

3

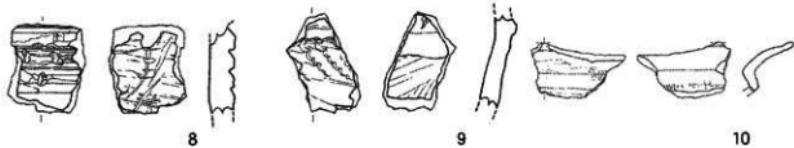
4



5

6

7



8

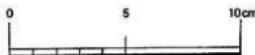
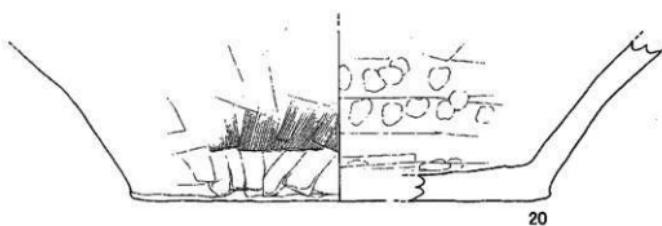
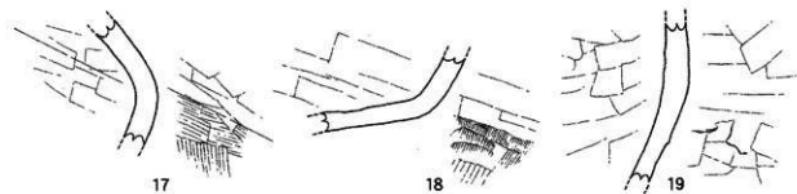
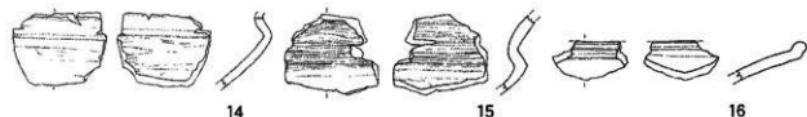
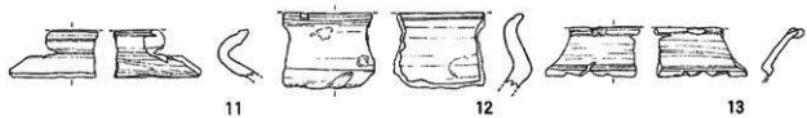
9

10



第 12 図

A地区出土遺物その2



第 13 図

部と思われるが言及はさけたい。焼成は、すべて良好で25, 28, 30をのぞく底部の胎土については、小礫を多量に含み共通している。

第IV類（復元完形品38）

38は甕で、胴部の一部が欠損していたものの全体を復元することができた。口縁部から約6センチほど下がった位置に一条の刻み目突帯を有する。残存する口縁部付近には、大量のすすが付着している。突帯から上部の口縁部では整形の際の棒状の積み上げの跡がはっきりと確認できる。底部から胴部付近の調整がていねいに行われていることに比べると口縁部付近では、非常に粗い調整である。底部は、底上げとなっている。焼成は良好で胎土には多量の小礫を含む。

中・近世（第13図17～20 第16図45～47 第15図34～37）

第I類（瓦質土器17～20）

17は胴部の破片で器形などは不明である。18は底部付近の破片で器形は鉢ではないかと思われる。外部にはハケ目状の調整の跡がみられる。19は胴部の破片で器形は不明。20は底部から胴部にかけてのもので外面にはハケ目状の調整跡が見られる。内部には指圧痕らしき跡も認められる。

第II類（青磁類45～47）

45は底部で器形などは不明である。46は茶碗の口縁部である。47は、底部から口縁部までの皿で約3分の2ほどが残存している。口縁部は花弁状に縁取られている。

第III類（土鍤34～37）

34はA地区の表採遺物で長さ4.3cm、最大幅1.6cm、厚さ1.6cmである。全体的には寸胴を呈しており、灰色の精製された胎土を使用している。35は第II層目からの出土で長さ4.5cm、最大幅1.5cm、厚さ1.4cmを測る。34と同様灰色を呈し、精製された胎土である。36は確認調査の際にトレンチNO.12より検出されたもので長さ5.7cm、最大幅1.5cm、厚さ1.6cmを測る。赤褐色を呈し、精製された胎土である。37は34と同様A地区の表採遺物で長さ4.9cm、最大幅1.3cm、厚さ1.3cmを測る。薄い灰色を呈し、精製された胎土を使用している。

2. B地区の遺物

B地区から出土した遺物で顯著なものは47の青磁の皿1点のみである。分類上1点のみの記述は難しいため前項の中・近世第II類で詳細を記述することとした。

(イ) 石器

石器に関しては、石鎚の1点を除いては第II層目から出土したものが大半で、試掘時に検出したものも2点入っているが、2点とも第II層目からの出土である。石鎚、石皿、磨石、石斧などが出土した。器種毎に分けて記述することとした。

1. 石鎚（第16図39～40）

39は今回検出された石鎚の中で唯一時期を比定できるものでアカホヤ層下部より出土した縄文時代早期のものである。先端部分は非常に鋭角に整形されているが抉りは浅く脚端の一方は欠損している。石材はチャートで最大長2.4cm、最大幅1.6cm、最大厚0.3cmを測る。40は外形を五角形に呈しており、脚部の両端から明瞭な抉りが施される。石材はチャートで最大長2.2cm、最大幅1.5cm、最大厚0.4cmを測る。

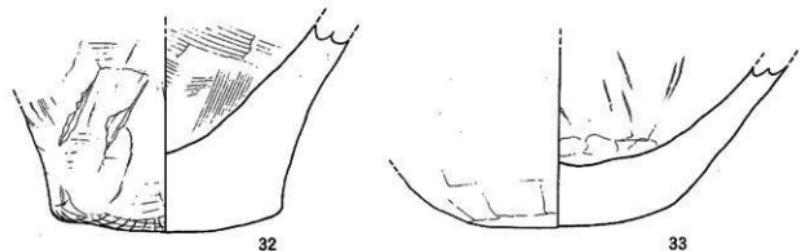
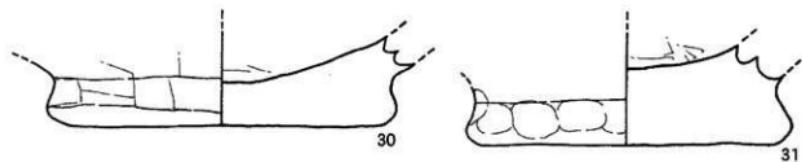
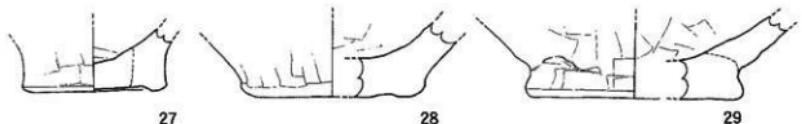
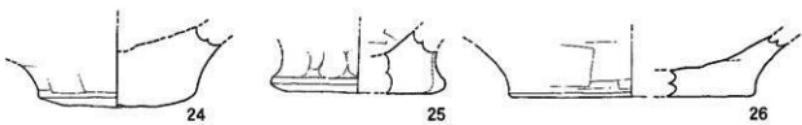
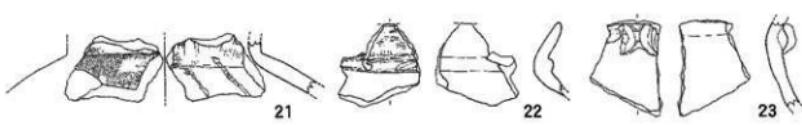
2. 石鎚未製品（第16図41～42）

41は石鎚未製品で両脚からの抉りなどは施されているものの2次加工などによる刃部などは認められなかった。石材は頁岩である。42は脚部からの抉りなどは施されているものの石鎚未製品である。41と比べると若干の2次加工の痕跡は認められる。石材は黒曜石である。

3. 小型剥片石器（第16図43～44）

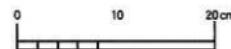
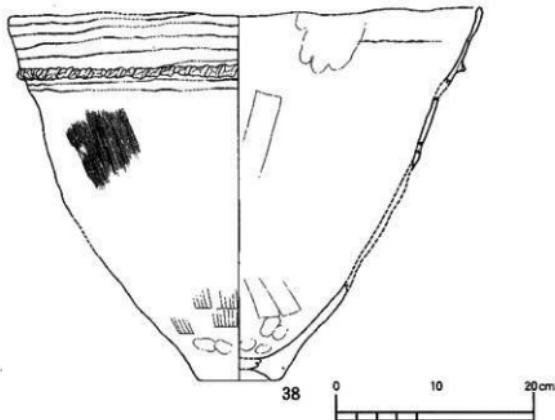
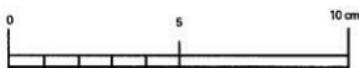
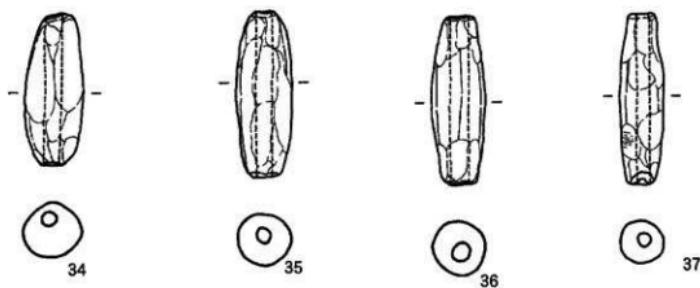
43は作業面再生剥片の可能性も否定はできないが、マイクロチップなどの共伴遺物が認められなかつたため剥片石器として分類し、今後の資料の増加を待ちたい。石材は、針尾産黒耀石で最大長2.8cm、最大幅1.6cm、最大厚0.3cmを測る。44は剥片石器で石材は、腰岳産黒耀石である。最大長3.0cm、最大幅1.5cm、

A地区出土遺物その3



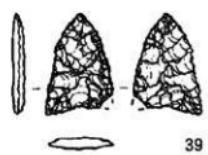
第 14 図

A地区出土遺物その4

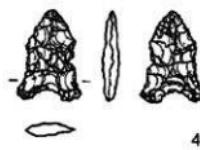


第 15 図

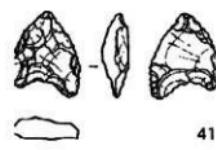
A地区及びB地区出土遺物その5



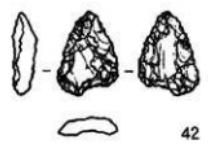
39



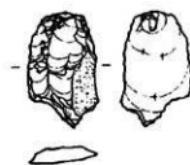
40



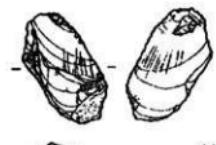
41



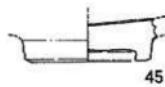
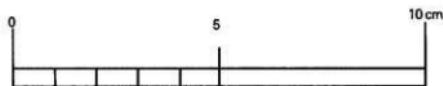
42



43



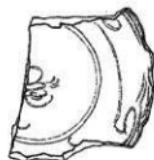
44



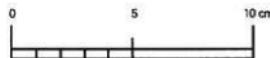
45



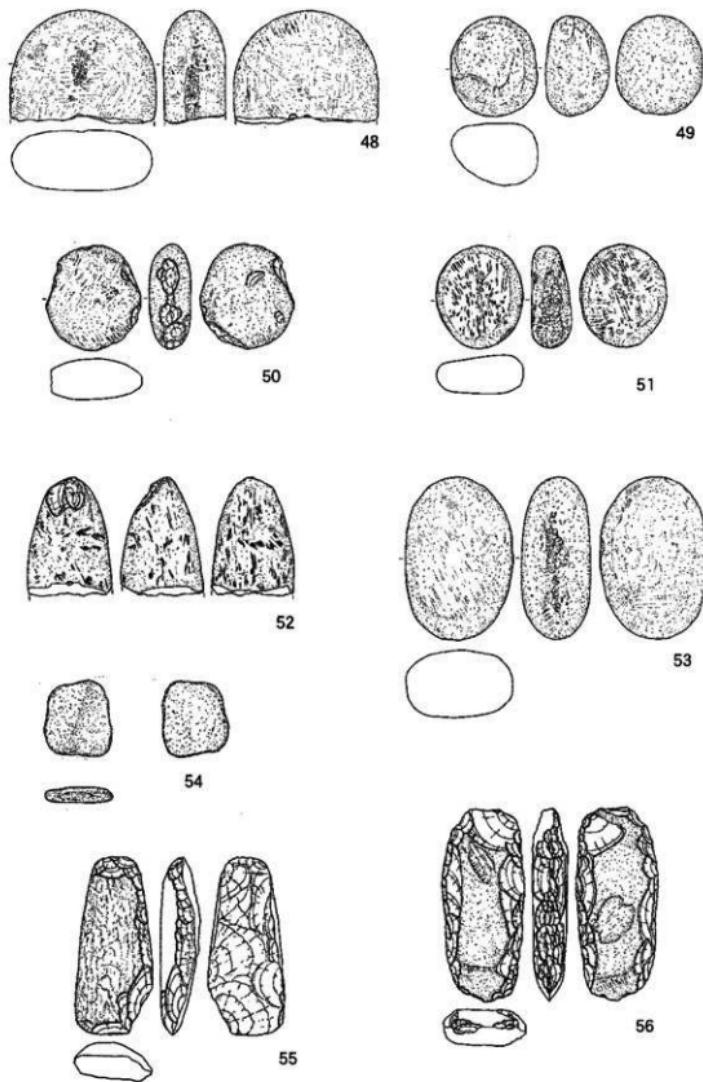
46



47



第 16 圖



0 5 10cm

第 17 図

最大厚0.6cmを測る。

4. 石皿 (第17図48)

石皿は数点検出されたが、紙面の都合などによりよく整形され使用痕のはっきりとして顕著なものを図示した。48はその約半分が欠損していたものよく整形され、片面にのみであるが浅い窪みのみられるものである。最大長は8.1cm、最大幅は10.6cm、最大厚4.5cmを測る。石材は砂岩である。

5. 磨石 (第17図49~51)

磨石に関しては数点検出されたが、顕著なものを3点図示することとした。49は片面を集中的に使用した痕跡を認める。石材は砂岩で最大長7.4cm、最大幅6.3cm、最大厚4.7cmを測る。50は縁辺部にいくつかの破損部分が認められ敲打的な使用も考えられるが、両面の顕著な摩擦の跡から磨石として分類した。

石材は砂岩で最大長6.9cm、最大幅6.2cm、最大厚2.7cmを測る。51は確認調査の際にトレンチNO.12より出土したものであるが、両面ともに入念な研磨跡を認めることができる。石材は砂岩で最大長6.7cm、最大幅5.7cm、最大厚2.7cmを測る。

6. 敲石 (第17図53)

53は綺麗に整形されており磨石との兼用も考えられるが、側縁部に敲打痕を顕著に認めることができるので敲石として分類し図示した。石材は砂岩で長径は10.7cmを測る。

7. 石錘 (第17図54)

54はこの遺跡より検出された唯一の石錘で石材は砂岩である。隅丸方形を呈し、対象となる側縁部の中心付近に抉り部を顕著に認めることができる。長径は5.4cmで幅は4.4cmを測る。漁網錘と考えられる。

8. 石斧 (第17図52、55~56)

52は磨製石斧の欠損品である。石材は流紋岩で先端部分に更に欠損した跡を認める。55は磨製石斧であるがちょうど縦方向に剥離した跡がみられる。石材は頁岩で長径は11.7cm、最大幅5.0cmを測る。この石斧は確認調査の際にトレンチNO.4から出土したものである。56は磨製石斧であるが、整形の後両縁部は交互剥離により短冊状に施してある。長径は12.7cm、最大幅は5.4cmを測り、石材は頁岩である。

第IV章 科学分析

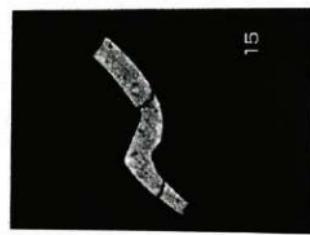
第1節 X線CTスキャナ分析

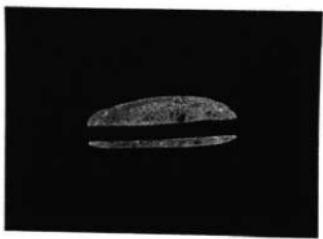
1. X線CTスキャナ分析について

X線CTスキャナ分析については熊本大学工学部教授尾原祐三氏に多大なるご協力をいただいた。紙面上ではあるがここで厚くお礼を申し上げたい。X線CTスキャナ分析についての構造や内容等については、本市『埋蔵文化財発掘調査報告書第11集』の中で詳しく取り上げているのでここでは省略することしたい。

2. X線CTスキャナの測定結果と利用法について

この分析方法の一番の特長は、非破壊分析であるということである。この点に着目し胎土の状況や土錘の断面撮影などを行ってみた。精製土器は、この測定結果での特筆すべき顕著なデータを得られなかつた。〔X線CTスキャナ解析画像（その1）11, 13, 15〕しかし、弥生土器に関しては、胎土中に含まれる小礫の含有状況（含有率）をよりビジュアル的に把握することができた。〔X線CTスキャナ解析画像（その1）32, 33〕このことは、胎土に含まれる小礫の割合などから生産地同定などに役立つ資料となりうる可能性がある。また、土錘などについては穿孔の幅や穿孔の状況など推測でしか判断できなかつたことが、よりビジュアル的に観察できるというメリットを得ることができた。〔X線CTスキャナ解析画像（その2）〕現時点ではそれ以上の活用法は見いだせないが、将来的に資料が増加していくればこれまで、観察できなかつた部分の分析・研究等を行うことにより、制作技法等を推定できひいては生産地同





34



35

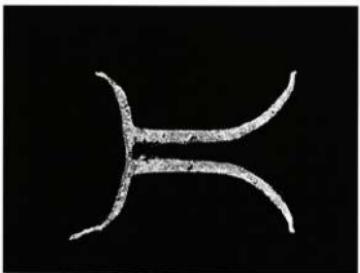
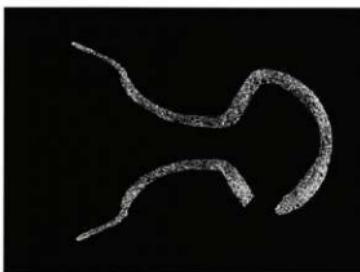
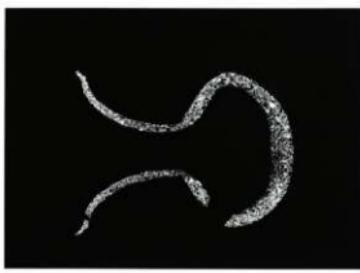


36





20



定などに役立つ資料となる可能性も否定できない。このような完形品で内部の様子が分からぬものに対する対応としては、非常に有意義なデータとなりうる。最後に本報告書と直接には関係ないが、本市所在の「狐塚古墳」より出土したハソウ、高杯の画像データを参考資料〔X線CTスキャナ解析画像（その3）〕として掲載して、本章の終わりとしたい。

第V章 まとめにかえて

楠原坂ノ上遺跡出土の遺物はその大半が第Ⅱ層からの出土である。この層位から出土した遺物も縄文時代早期～中・近世までと幅広い。遺構についても検出されなかったことや遺物包含層が地表面から非常に浅い状況で検出されたことなどを考慮すると攢乱層からの一括出土として取り扱うことが適当ではないかと思われる。各時代毎には顯著な遺物も出土しているので、私見を交えて述べることとまとめてかえたい。

縄文時代早期については、1点のみで貝殻文系の土器である。これまで日南市内では、平成8年度に調査を実施した川辺ヶ野遺跡で集石遺構に伴い貝殻文系土器が出土している。本遺跡からは顯著なものがこれ1点にとどまっているので型式などについての言及は今後の本市の資料増加を待ってからとしたい。

縄文時代後・晚期についても第Ⅰ類から第Ⅳ類にまで分類は行ったが、出土点数などから第Ⅰ類と第Ⅳ類について言及することとしたい。まず第Ⅰ類であるが、頸部の「く」の字に折れ曲がることが特徴的で晚期の入佐式土器の範疇に含んで良いのではないかと思われる。1については補修孔の跡がみられるが、こういった補修孔の跡は鹿児島県「沖田岩戸遺跡」出土に遺物などにもみられる。第Ⅳ類の精製土器については晚期の黒色磨研土器である。型式などについては、破片資料で数が少なく遺構なども伴っていないので今後の本市内の資料増加を待ってからとしたい。

弥生時代の遺物については、完形品を除いてその大半が底部と小さな破片であるため型式等についての記述は避けたい。しかし、胎土や焼成の状況、本市の「大園遺跡」出土遺物との比較検討などから、弥生時代後期後葉の遺物にその大半が含まれると考えられる。特にほぼ完形となった38は前述した特徴から石川氏編年のV期-bにあたり、弥生時代後期後葉の「下那珂式土器」の範疇に含まれる。本遺跡を代表する弥生時代の遺物である。

中・近世の遺物については、瓦質土器や青磁などが検出されたが個々についての型式設定については資料の増加を待つこととしたい。

石器類については、石鏃、石鏃未製品、小型剥片石器、磨石、石錘、石斧など多岐に渡った。39の石鏃については層位から縄文時代早期が比定できた。しかし、そのほかの石器類については時代を確定することは困難である。共伴する遺物の出土量から推定すれば、縄文時代後・晚期～弥生時代の石器とすることが妥当ではある。

楠原坂ノ上遺跡では、遺構の存在が予想される部分についての調査が実施できなかったが、本遺跡の調査結果は今後本市内で行われる調査において十分活用されるべき貴重な資料となつた。本市内における調査の数は未だ少ないが、隣接する地域との資料比較や各時代における文化圏内における技術的系譜や歴史的変遷とも合わせ検討していくことが必要であろう。

〔参考文献〕

- 石川 悅雄 1984年「宮崎平野における土器の編年試案－素描（MK.II）」『みやざき考古』
第9回宮崎考古学会
- 宮崎県埋蔵文化財センター 1998年『荒迫遺跡』
「宮崎フリーウェイ工業団地造成事業に伴う発掘調査報告書」
- 宮崎県埋蔵文化財センター 1998年『市位遺跡』「希望ヶ丘西区画整理事業に伴う発掘調査報告書」
- 宮崎県埋蔵文化財センター 1999年『牧の原第2遺跡』
「総合農業試験場畑作園芸支場整備事業に伴う発掘調査報告書」
- 宮崎県埋蔵文化財センター 1999年『内屋敷遺跡』
「県立小林高等学校生徒寮建設に伴う発掘調査報告書」
- 宮崎県埋蔵文化財センター 1999年『鶴野内中水流遺跡』
「特定交通安全施設整備事業に伴う発掘調査報告書」
- 宮崎県埋蔵文化財センター 1999年『神殿遺跡B.C地区、南平第3遺跡、南平第4遺跡、中ノ原遺跡』
「一般国道218号線高千穂バイパス建設に伴う発掘調査報告書」
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2000年『上の原第2遺跡、上の原第1遺跡、上の原第4遺跡、白ヶ野第3遺跡A
地区』「時屋地区農地保全整備事業に伴う発掘調査報告書」
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2000年『竹ノ内遺跡』「一般県道清武インター線道路改良事業に伴う発掘調
査報告書」
- 宮崎市教育委員会 1998年『二月田遺跡、芋字遺跡』
「県営扱い手育成基盤事業 富吉地区に伴う発掘調査報告書」
- 宮崎市教育委員会 1999年『熊野第2遺跡』
- 宮崎市教育委員会 1999年『東宮遺跡』「東宮上地区画整理事業に伴う発掘調査報告書」
- 宮崎市教育委員会 1999年『下郷遺跡』
- 宮崎市教育委員会 2000年『黒太郎遺跡』
- 都城市教育委員会 1995年『丸谷地区遺跡群 上大五郎遺跡』
「丸谷地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告書」
- 都城市教育委員会 1996年『加治屋遺跡2』
- 都城市教育委員会 1996年『丸谷地区遺跡群 中大五郎第1遺跡、中大五郎第2遺跡、本池遺跡、
前畠遺跡』「丸谷地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告書」
- 都城市教育委員会 1997年『大浦遺跡』
「道路建設事業「臨時地方道整備事業」に伴う発掘調査報告書」
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 1997年『神野牧遺跡』「県道鹿屋環状線改修工事に伴う発掘調査報告書」
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2000年『沖田岩戸遺跡』「高柳中小河川改修工事に伴う発掘調査報告書」
- 日南市教育委員会 1998年『大國遺跡』「農村資源活用農業構造改善事業日南市都市農村交流
センター建設に伴う発掘調査報告書」
- 日南市教育委員会 1999年『堂之元遺跡、川辺ヶ野遺跡、上鶴遺跡、木落遺跡』
「九州電力株式会社宮崎支店66kv筑肥～福島線送電線新設工事に伴
う発掘調査報告書」

出土土器觀察表(その1)

因面 番号	遺物 番号	遺跡名	器種	器 部	文様および調査				色	調 査	胎 土	備 考
					外 面	内 面	焼成	外 面				
1	P-347	A区 II層	甕	口縁部	横ナデ	横ナデ	良好	褐灰色 7.5YR4/1	黄灰色 2.5Y4/1	灰褐色の砂粒を多く含む	綱文土器直径1cm大の穿孔有、表面にスス付着	
2	P-362	"	-	"	ていねいな横ナデ	横ナデ	"	灰褐色 7.5YR4/2	褐灰色 7.5YR4/1	雲母を含む	綱文土器、表面にスス付着	
3	P-329	"	-	"	横ナデ	ていねいな横ナデ	"	にぶい黄褐色 10YR5/3	灰褐色 10YR4/2	灰褐色の砂粒を多く含む	綱文土器、口縁部上部にスス付着	
4	P-290	"	-	"	口縁部付近は横ナデ、それ以外斜め方向のナデ、一部へラ使用	横ナデ	"	褐灰色 7.5YR4/1	灰褐色 7.5YR4/2	白色の砂粒を多く含む	綱文土器、内・外側ともに多量のスス付着	
5	P-63	"	-	脣部	ていねいな横ナデ	粗い横ナデ	"	灰褐色 7.5YR4/3	灰褐色 5YR4/2	1mm大の灰褐色の粒子を多く含む	綱文土器、外側に多量のスス付着	
6	P-19	"	-	口縁部	横ナデ	外面に比べていいねいな横ナデ	"	灰褐色 7.5YR4/2	灰褐色 10YR4/2	雲母を多く含む	綱文土器、外側に多量のスス付着	
7	P-287	"	-	脣部	横ナデ	風化により不明	"	褐色 7.5YR4/3	にぶい褐色 7.5YR5/3	2~3mm大の礫を含む	綱文土器、外側に多量のスス付着	
8	P-16	"	-	口縁部	横ナデ、ヘラによる三条の沈線	ていねいな横ナデ	"	にぶい赤褐色 2.5YR4/3	にぶい赤褐色 5YR5/4	雲母を含む、1~2mm大の砂粒を多く含む	綱文土器、外側にスス付着	
9	P-36	"	-	脣部	横ナデ調整の上に左斜め方向の貝焼網文	斜め方向のナデ	"	にぶい赤褐色 5YR5/4	にぶい褐色 7.5YR5/4	1~3mm大の黒色の礫を多く含む	綱文土器	
10	P-47	"	-	口縁部	横ナデ、一部風化が激しい	横ナデ、一部風化が激しい	"	にぶい黄褐色 10YR5/3	灰褐色 10YR5/2	雲母を含む	綱文土器	

第2表

出土器類表(その2)

図面番号	遺物番号	遺物名	器種	部	文様および調整			施成	色調		土	備考
					外 面	内 面	横		外 面	内 面		
11	P-12	A区Ⅱ層	壺	口縁部	非常にていねいな横方向の研磨痕	横方向の研磨痕、口縁部下に一条の丸線	良好	青背灰色 10BG3/1	青オリーブ褐色 2.5Y3/3	白色の砂粒を含む	黒色磨研土器、彌文輪刺	
12	P-24	"	鉢	"	"	"	"	反黄褐色 10YR5/2	黄灰色 2.5Y4/1	"	"	
13	P-16	"	壺	"	突起状の飾り有	"	"	灰褐色 7.5YR4/2	褐灰色 10YR4/1	"	"	
14	P-35	"	鉢	口縁部～肩部	"	"	"	黒褐色 10YR3/1	黒褐色 10YR3/1	"	外面に多量のスリ付着	
15	P-21	"	鉢	"	"	"	"	灰褐色 7.5YR4/2	褐灰色 10YR4/1	"	"	
16	P-23	"	口縁部	"	"	"	"	灰黄褐色 10YR4/2	灰ぶい褐色 7.5YR5/3	"	"	
17	P-15	"	—	胴部	ヘラナデ繪	"	"	オリーブ黄色 5Y5/2	赤灰色 2.5YR4/1	"	"	
18	P-47	"	—	胴部～底部	"	"	"	灰褐色 7.5YR4/2	赤灰色 2.5YR4/1	"	中近世瓦器	
19	P-48	"	鉢	胴部	—	—	"	赤灰色 10YR4/1	赤灰色 2.5Y4/1	"	東晉系土器	
20	P-71	"	鉢	胴部～底部	—	—	"	灰黄褐色 10YR4/2	灰黄褐色 10YR5/2	"	"	

第4表

出土土器観察表(その3)

図面番号	遺物番号	器種	器部	文様および調整		焼成	外 面	内 面	調	胎 土	備 考
				外 面	内 面						
21	P-58	A区 直層	口縁部 前 脣部	口縁部一横ナデ 前 脣部	口縁部一横ナデ 前 脣部	良好	褐色 5YR6/6	褐色 5YR6/6	1~3mm大の礫を多く含む	劣生土器	
22	P-66	"	"	風化により不明、 く びれ部に一束の突帯	風化により不明、 く びれ部に一束の突帯	"	にぶい褐色 7.5YR6/4	にぶい褐色 7.5YR6/4	"	"	"
23	P-40	"	"	風化により不明、り ボン状の垂り	風化により不明、り ボン状の垂り	"	にぶい褐色 7.5YR5/4	にぶい黄褐色 10YR5/3	"	"	"
24	P-43	"	—	底部	—	"	にぶい褐色 7.5YR5/4	にぶい黄褐色 10YR5/3	2~3mm大の礫を多く含む	"	"
25	P-43	"	—	"	—	"	にぶい褐色 7.5YR5/4	にぶい黄褐色 5YR4/2	"	"	"
26	P-312	"	—	"	横ナデ	風化により不明	"	にぶい黄褐色 10YR5/3	"	"	"
27	P-75	"	—	"	"	"	にぶい褐色 7.5YR5/4	にぶい褐色 7.5YR4/2	"	"	"
28	P-13	"	—	"	縦ナデ	"	にぶい褐色 7.5YR5/4	褐色 7.5YR4/3	"	"	"
29	P-15	"	—	"	横ナデ	"	にぶい褐色 7.5YR5/4	オリーブ黒色 5YR1/1	"	"	"
30	P-411	"	—	"	"	"	にぶい褐色 7.5YR5/4	にぶい褐色 7.5YR6/4	"	"	"

出土土器調査表（その4）

団面番号	遺物番号	遺物名	器種	器部	文様および測定			色調			備考
					外 面	内 面	焼成	外 面	内 面		
31	P-46	A区 II層	—	底部	織ナデ	—	良好	にぶい褐色 7.5YR5/4	灰褐色 7.5YR4/2	3~5mm雲母、5mm大の礫 を多く含む	弥生土器
32	P-30	"	—	"	織ナデ	"	にぶい褐色 7.5YR6/4	にぶい褐色 10YR5/3	"	"	"
33	P-297	"	—	風化により不明	風化により不明	"	にぶい褐色 7.5YR6/4	にぶい褐色 7.5YR5/4	にぶい褐色 7.5YR5/4	2~3mm大の雲母を多く含 む	"
38	P-178	壺	完形品	口縁部付近には織ナ デ。断部には織ナ デ。断部中央付近に は下方向のハケ目。 底部には上方向 のハケ目。底部には 指頭圧痕が残る。	口縁部付近は、織ナ デ。断部中央付近に は下方向のハケ目。 底部付近では上方向 のハケ目。一番底部 には指頭圧痕が残る。	良好	にぶい褐色 7.5YR5/4	橙色 5YR6/6	2~3mm大の雲母を多く含 む。 そのほか3~5mm大の灰色 の砂粒を含む	弥生時代後期 下都阿式土器 この完形品は、7つほど のナンバーリング土器片 が接合	"
45	P-113	"	—	"	底部裏側に糸切痕	—	灰褐色 10YR5/2	暗灰黄色 2.5YR5/2	—	—	青磁
46	表採	"	—	口縁部	—	—	—	オリーブ灰褐色 10Y5/2	オリーブ灰褐色 10Y5/2	—	"
47	表採	B区 II層	皿	口縁部 ～ 胸部	—	—	—	緑灰色 7.5GY6/1	オリーブ灰色 5GY6/1	—	"

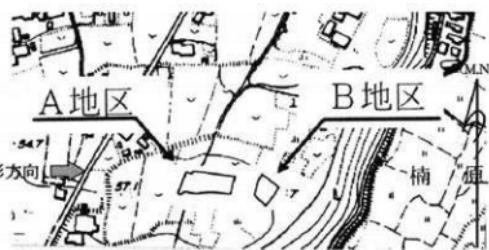
土錘・石器法量計測表

土錘法量計測表								
圓面 番号	遺物 番号	遺構名	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備 考
34	表採	A区	土錘	4.3	1.6	1.6	10.0	—
35	P-215	A区II層	#	4.5	1.5	1.4	9.0	—
36	TR-12	シクツ	#	5.7	1.5	1.6	9.0	—
37	表採	A区	#	4.9	1.3	1.3	9.0	—

石器法量計測表

第 6 表

楠原坂ノ上遺跡全景



図版 1



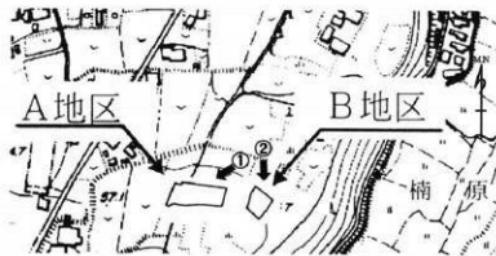
①A地区調査前状況

図版 2



②B地区調査前状況

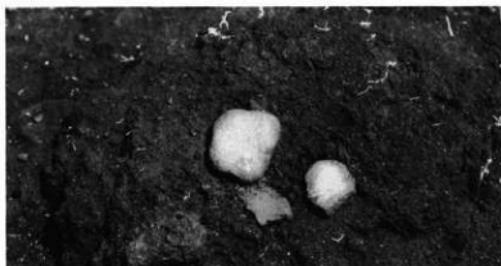
図版 3



A地区遺物出土状況(その1)



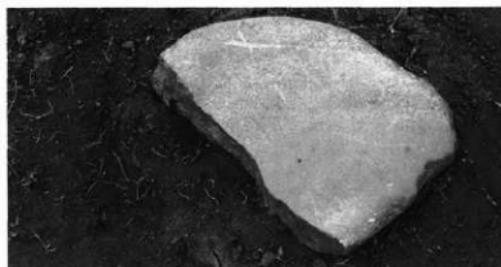
①アカホヤ上部遺物検出状況



②石錘等検出状況



③弥生土器底部検出状況



④石皿検出状況

A地区遺物出土状況(その2)



①弥生底部検出状況



②縄文土器口縁部検出状況



③土錘検出状況



④アカホヤ下層石鏃検出状況

A地区土層断面(その1)



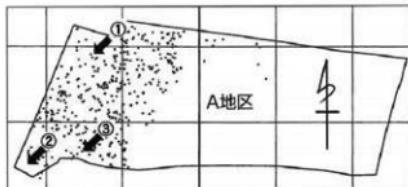
①A地区土層断面



②A地区土層断面



③A地区土層断面

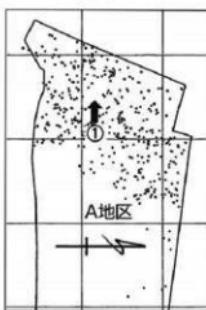


図版 6

A地区土層断面(その2)及びB地区土層断面



①A地区東西土層断面



②B地区土層断面



③B地区土層断面

A地区

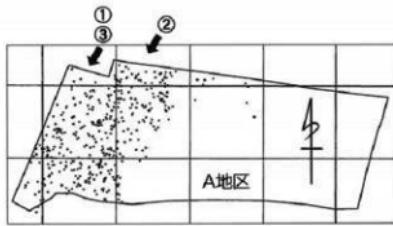


図版 7

A地区遺構等検出状況(アカホヤ層上部)



①アカホヤ層上部精査状況（その1）



②アカホヤ層上部精査状況（その2）



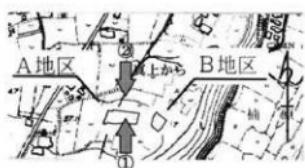
③アカホヤ層上部掘り下げ状況

調査終了後状況

①調査終了後状況(遠景)



②調査終了後状況(近景)

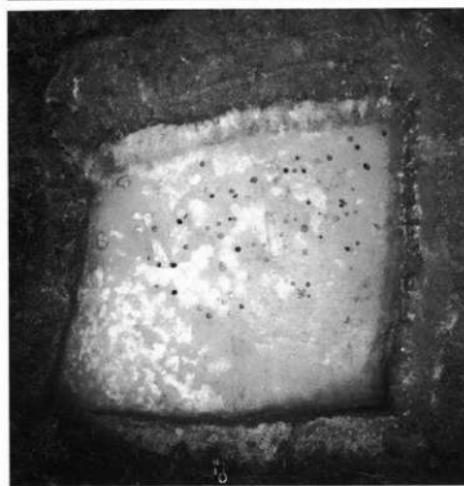


図版 9

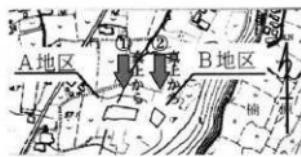
A地区及びB地区調査終了後状況



①A地区調査終了後状況

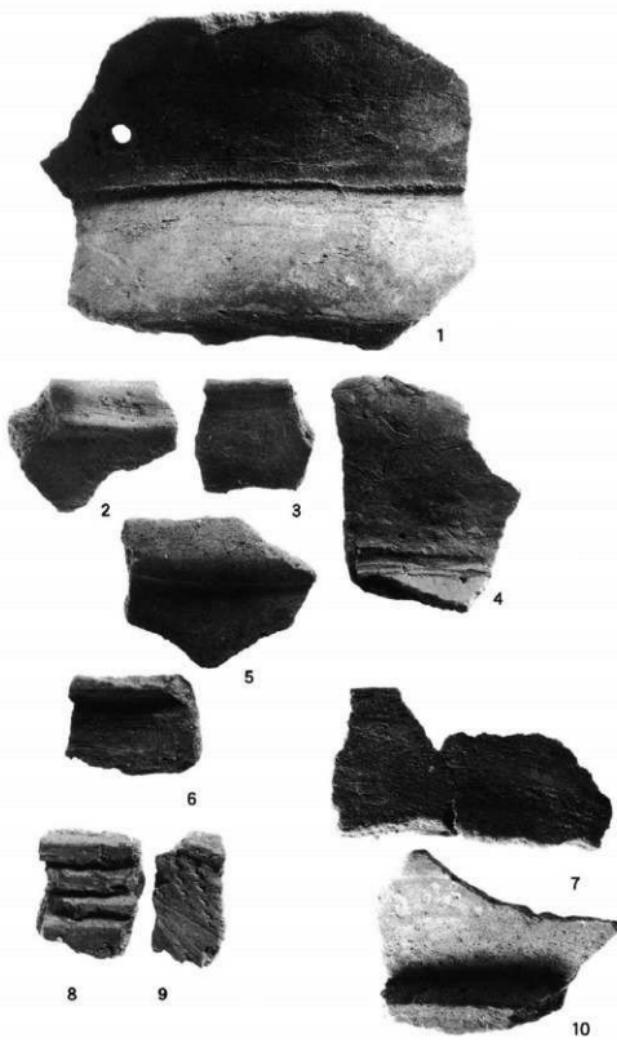


②B地区調査終了後状況



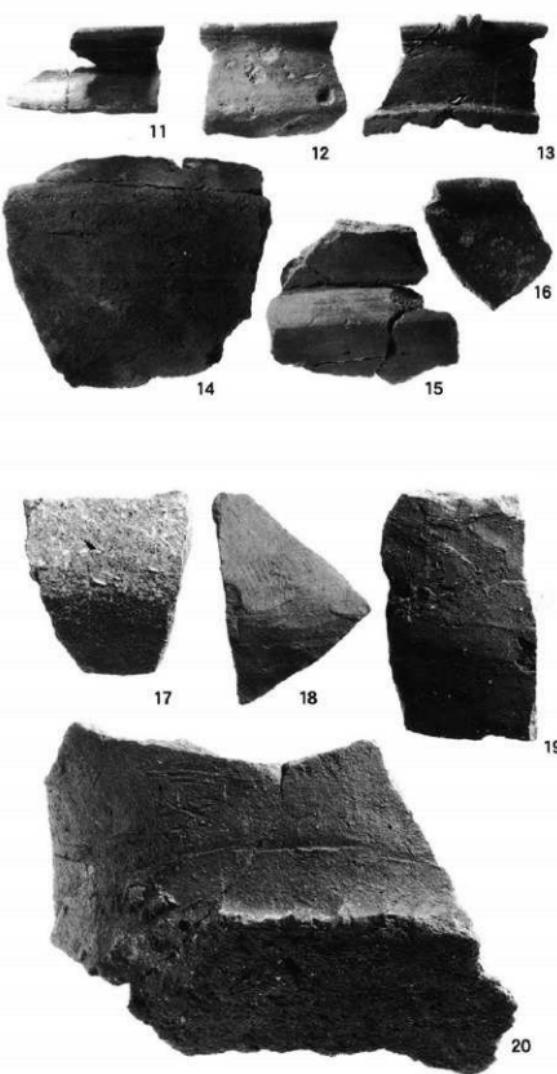
図版 10

A地区出土遺物(その1)



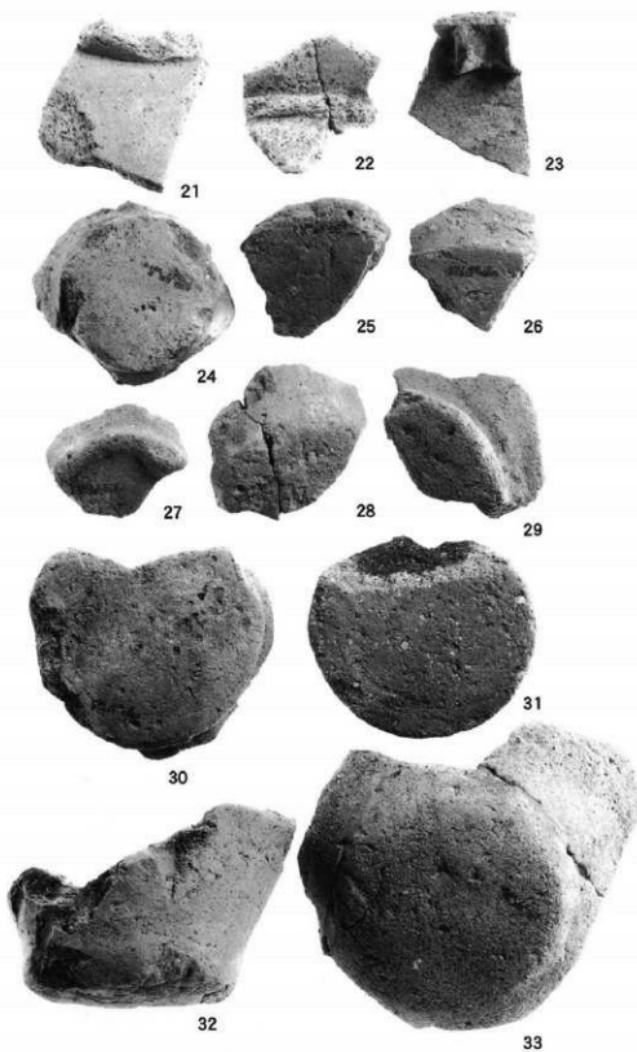
図版 11

A地区出土遺物(その2)



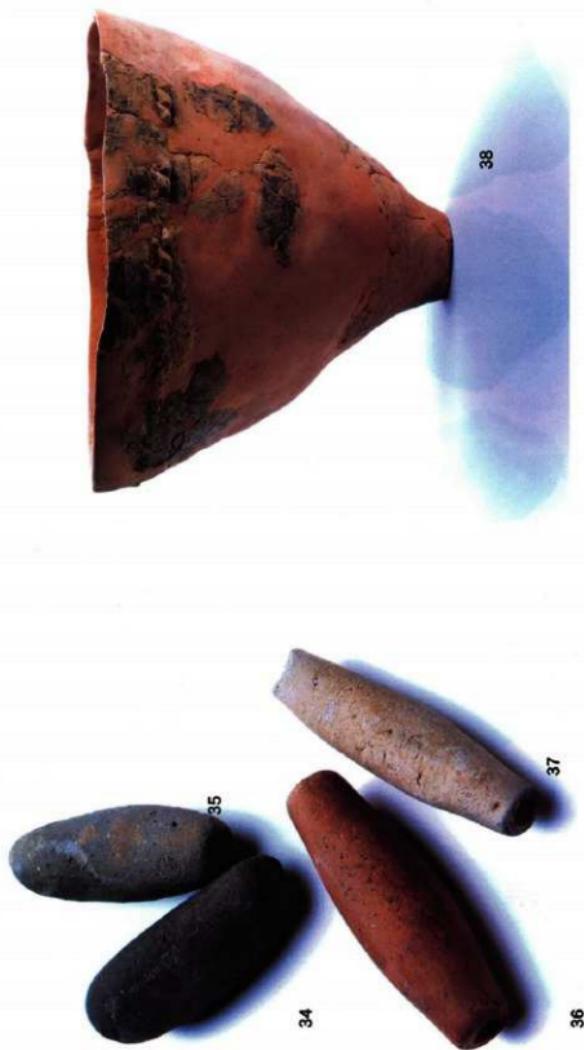
図版 12

A地区出土遺物(その3)

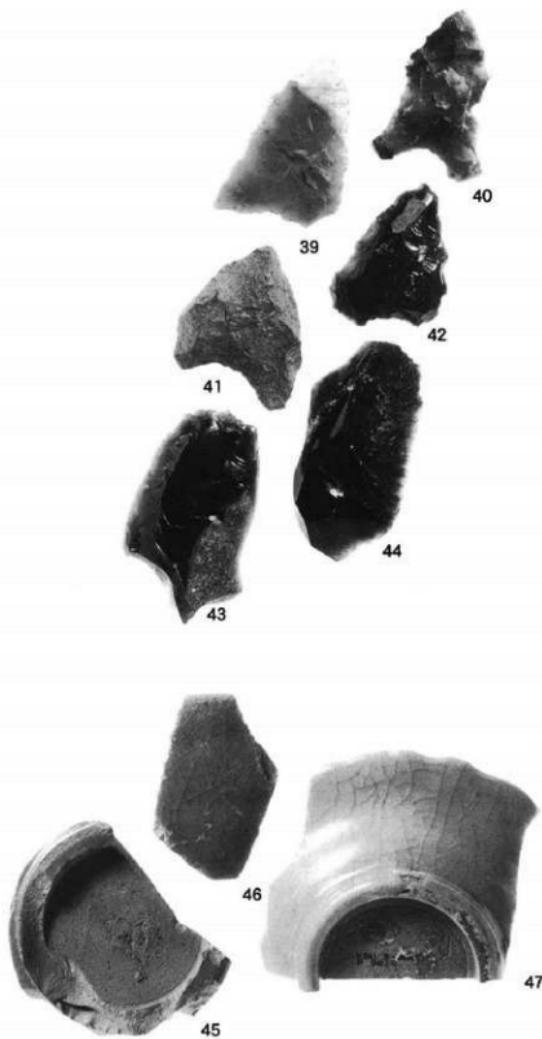


図版 13

A地区出土遺物(その4)

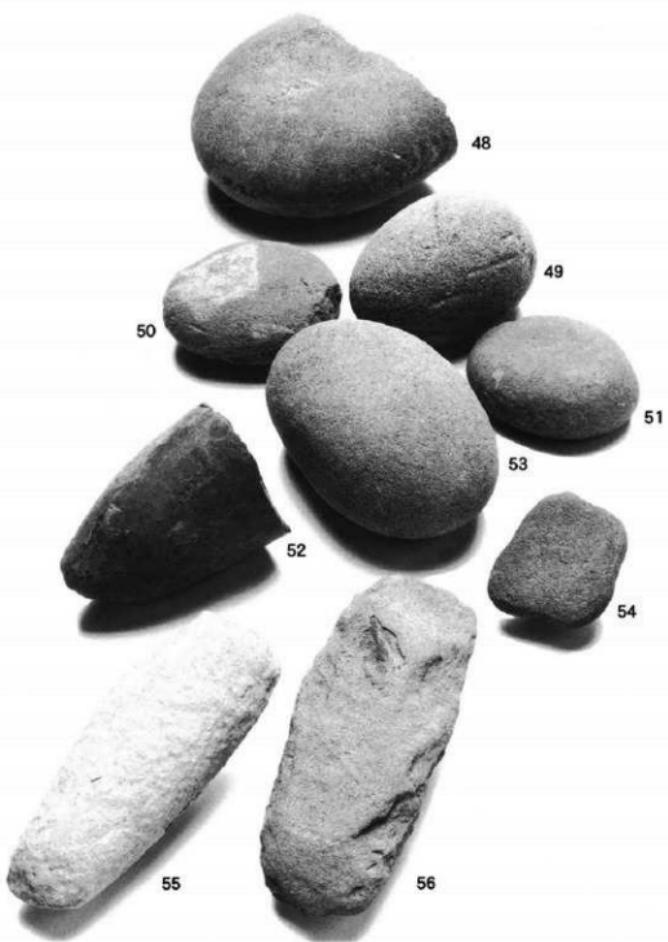


A地区出土遺物(その5)及びB地区出土遺物



図版 15

A地区出土遺物(その6)



GPS測量(座標観測)の状況



作業風景



図版 18

報告書抄録

ふりがな	くすばるさかのうえいせき
署名	楠原坂ノ上遺跡
副書名	社会福祉法人「徳榮会」特別養護老人ホーム建設に伴う埋蔵文化財調査報告書
卷次	
シリーズ名	日南市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第14集
編著者名	的場 文明
編集機関	日南市教育委員会
所在地	〒887-8585 日南市中央通1丁目1-1 TEL: 0987-31-1145 FAX: 0987-24-0987
発行年月日	2001年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'\"	東經 °'\"	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くすばるさかのうえいせき 楠原坂ノ上 遺跡	にちなんしおおあざ 日南市大字 くすばる 楠原1840 番地	日南市	7 2 1	31° 36' 51"	131° 20' 38"	平成10年 7月10日 ～ 10月30日	1300	特別養護老 人ホーム 「はまゆう の里」建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
楠原坂ノ上 遺跡	散布地	縄文時代 早期～近世	特になし	縄文時代早期 貝殻文系土器 縄文後・晚期 精製磨研土器 弥生時代 後記後葉土器 中・近世 土鍬、瓦質土器、 青磁など	本遺跡は、当初楠 原遺跡の名称で申 請書類、届出等の 事務処理を行った。 報告書刊行に際し ては、本市塙田に存 在する坂ノ上遺 跡と同名で区別し づらいため大字名 「楠原」の冠をつ け、楠原坂ノ上遺 跡とした。

調査にご協力いただいたみなさん



鎌田留次郎 平川フミオ 黒木正男 岩永典良 鎌田和枝 山室 光
金丸恵美子 杉元早苗 倉元ハルエ 長友ヤツミ 前田マサコ 黒木カヨ 大田原俊太郎

整理作業にご協力いただいたみなさん



貴島芳栄

谷口キヨ子

山室 光

日南市埋蔵文化財調査報告書 第14集

くす ばる さか の うえ い せき
楠原坂ノ上遺跡

2001年3月

編集発行 日南市教育委員会
〒887-8585 日南市中央通1丁目1番地1
電話 0987-31-1145

印 刷 (株) おび印刷
〒889-2535 日南市飫肥3丁目2-16
電話 0987-25-1680

